

大学共同利用機関法人

人間文化研究機構

National Institutes for the Humanities

要覧 2009



大学共同利用機関法人

人間文化研究機構

National Institutes for the Humanities

要覧2009

目次

機構長あいさつ	1
設立の経緯と目的	2
組織図	3
人間文化研究総合推進事業	4
・ 人間文化研究総合推進検討委員会	4
・ 連携研究	4
・ 連携展示	7
・ 研究資源の共有化事業	8
・ 知的財産	9
・ 講演会・シンポジウム	10
地域研究推進事業	11
各機関の活動	12
・ 国立歴史民俗博物館	12
・ 国文学研究資料館	16
・ 国際日本文化研究センター	20
・ 総合地球環境学研究所	24
・ 国立民族学博物館	28
資料	32
委員会一覧	32
経営協議会/教育研究評議会/人間文化研究総合推進検討委員会/評価委員会/ 機構会議/企画・連携・広報室/連携研究委員会/研究資源共有化事業委員会/ 地域研究推進委員会	
データ一覧	34
職員数/予算・決算/共同研究の件数および共同研究員数/ 研究者の受け入れ・派遣/外部資金の受け入れ/データベース一覧/大学院教育	

表紙

「黒綸子地花入蘭模様絞縫小袖」

国立歴史民俗博物館蔵

ごあいさつ



大学共同利用機関法人・人間文化研究機構は、平成16年(2004)に設立された人文学系の研究組織で、国立歴史民俗博物館、国文学研究資料館、国際日本文化研究センター、総合地球環境学研究所および国立民族学博物館の5つの研究機関によって構成され、平成21年10月には国立国語研究所が設置されます。本機構は、これらの諸機関がそれぞれの設立目的を果たすとともに、学問的伝統の枠を越えて連合し、自然環境をも視野に入れた人間文化の研究組織として、大学共同利用の総合的研究拠点を形成しようとするものです。

現在、自然と人間の営為が、地球規模で急激に絡み合い、さまざまな難問が顕在化しています。この地球化の時代にあって、すべての学問の基礎である人文学の重要性を再提示するとともに、新しいパラダイムの方向性をも視野に入れつつ21世紀の諸課題に立ち向かおうとしています。

本機構は、こうした目標を達成するための事業のひとつとして、機構を構成する5つの研究機関を中核とし、国内外の大学・研究機関の研究者の参画を得て「連携研究」を実施しています。また、これら5機関が所蔵する膨大な研究資料と蓄積した研究成果をデジタル化して、これをネット上の共通のプラットフォームで利用できるようにし、あわせて広く情報提供するための「研究資源共有化」事業を本格化させ、その公開を進めるとともに機構外とのリンクをめざしています。さらにわが国の地域研究の拠点形成を進めるため、地域研究推進センターを設置し、現在10余の研究プロジェクトを推進し、さらに拡大をめざしています。そのため、本機構は研究者を採用し、各大学へ派遣しています。

本機構の研究者が、それぞれの研究分野における個性を保ちつつ高いレベルの研究成果を創出すると同時に、みずからの専門分野を超えたさまざまな研究プロジェクトに積極的に参画することによって、本機構を人間文化の総合的学術研究の世界的拠点として発展させるべく、今後とも努力を続ける所存です。

平成21年7月

大学共同利用機関法人
人間文化研究機構
機構長 金田 章裕

|| 設立の経緯と目的

大学共同利用機関は、学術研究の拠点として、大規模な研究設備や膨大な資料・情報などを我が国および諸外国の大学等の研究者の利用に供するとともに、それを通じて効果的な共同研究を実施する研究機関です。

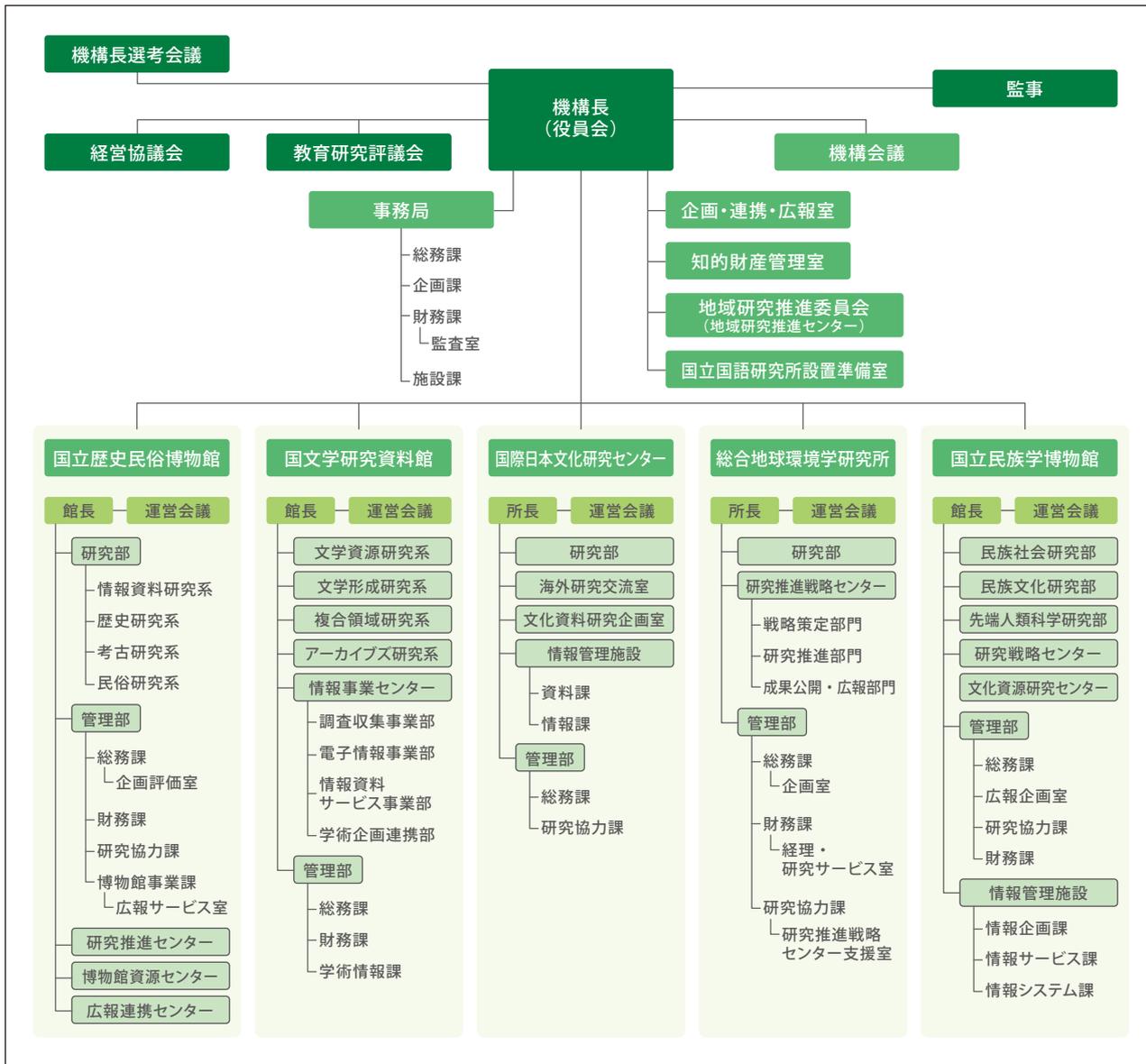
大学共同利用機関の法人化にあたっては、平成16年(2004)4月に既存の16の研究機関が、人間文化研究機構、自然科学研究機構、高エネルギー加速器研究機構、情報・システム研究機構の4つの機構に再編されましたが、大学共同利用機関としての役割である共同利用および外部に開かれた運営は機構ごとに充分確保できるよう体制整備、充実を図りました。

大学共同利用機関法人・人間文化研究機構は、人間文化に関わる5つの大学共同利用機関(国立歴史民俗博物館、国文学研究資料館、国際日本文化研究センター、総合地球環境学研究所、国立民族学博物館)によって構成され、平成16年(2004)4月に設立されました。また、平成21年10月には、新たに国立国語研究所が設置されます。

21世紀を迎えた今日、自然と人間の歴史的営為が地球規模で複雑に絡み合った難問が山積しています。本機構は、それらに対応するために、自然環境をも視野に入れた人間文化に関する総合的研究をめざして、5つの研究機関が旧来の学問の枠を超えて連合し、新しいパラダイムを創出する研究拠点を形成するとともに、膨大な文化資料に基づく実証的研究、人文・社会科学の総合化をめざす理論的研究など、時間、空間の広がりを見視野に入れた文化に関わる基礎的研究および自然科学との連携も含めた研究領域の開拓に努め、また、課題解決型の研究にも取り組み、文化の総合的学術研究の世界的拠点となることを目標とするものです。

機構を構成する各研究機関とその研究者は、それぞれの個性を保ちつつも、その専門分野を超えた研究プロジェクトに積極的に参加することによって、機構の創造的発展を図ります。本機構には、博物館、資料館の文化資料のナショナルセンターとしての機能を持つ研究機関が参画しています。機構を構成する各研究機関がすでに蓄積し、これからも収集に努める「資料」と「情報」に基づき、機構内外の研究者の総力を結集して調査研究を実施し、機構全体としてその研究成果を展示、刊行物、さらにはあらゆる情報機能などを活用することにより広く国内外に発信し、学術文化の進展に寄与することをめざすものです。

組織図



◆ 機構役員

金田 章裕	機構長
篠原 徹	理事
中尾 正義	理事
小林 敬治	理事(非常勤)
石上 英一	理事(非常勤)
松澤 員子	監事(非常勤)
新保 博之	監事(非常勤)
大崎 仁	機構長特別顧問

◆ 各機関の長

平川 南	国立歴史民俗博物館長
今西 祐一郎	国文学研究資料館長
猪木 武徳	国際日本文化研究センター所長
立本 成文	総合地球環境学研究所長
須藤 健一	国立民族学博物館長

◆ 機構本部

篠原 徹	企画・連携・広報室長
中尾 正義	知的財産管理室長
平野 健一郎	地域研究推進センター長
影山 太郎	国立国語研究所設置準備室長

◆ 事務局

栗城 繁夫	事務局長
井上 明夫	総務課長
阿内 達雄	企画課長
大西 由喜男	財務課長
甲州 与志雄	施設課長

人間文化研究総合推進事業

21世紀における人類にとって最も重要で緊急の課題は、地球における人類の存続と、世界における人間の共生です。この難問を解く鍵は「文化」にあるとの発想に基づき、人間文化研究機構は人間文化研究の新たな領域を、従来の枠組みを超えて創出し、先端的・国際的な研究を展開するため、次の事業を実施しています。

- 人間文化研究総合推進検討委員会
- 人間文化研究資源の共有化推進
- 人間文化研究機構内外機関の連携研究などの推進
- 国際連携協力
- 情報発信など

人間文化研究総合推進事業は、法人化2年目（平成17年度）から措置された特別教育研究経費により実施されており、着実に成果を挙げています。

人間文化研究総合推進検討委員会

人間文化に関する新たな研究推進の方向、推進すべき領域、課題およびそのための研究体制の構築などを検討します。平成20年度から機構長や理事などの役員が新たになり、前年度までの事業を継承しつつ新たな事業も推進していきます。総合推進検討委員会のこれまでの検討をふまえて、平成20年度より人間文化研究の新たな領域創出のための具体的な検討を始めました。そのためいくつかの研究会を公募し、第2期中期計画・中期目標の素材になるような研究と研究枠組みを検討しています。すでにスタートしている検討部会の内容と平成20年度より加えた方針について以下に記します。

1. 第2期中期目標・中期計画に向けて

平成20年度、平成21年度の2年間は、第1期中期目標・中期計画の終了期間です。基本的にはこの2

年間に第2期中期目標・中期計画のインキュベーション的な研究を進めて、そのことを前提にした第2期の人間文化研究総合推進事業の目標・計画を立てます。

平成20年度にはこうしたインキュベーション的な研究を22課題採択しました。平成21年度には前年度の研究、あるいは今年度新たにを行うインキュベーション的なものも視野にいて、第2期の連携研究、連携展示、国際連携協力に基づく研究などにつながる研究を実施します。

2. 国際連携協力検討部会

機構を構成する5つの機関は、それぞれのミッションに従い、従前から独自の国際連携を行ってきています。

それらの活動に加えて、オランダの国際アジア研究所、フランスのフランス高等研究所およびイギリスの英国芸術・人文リサーチ・カウンシルと、機構として協力協定を締結しています。これらの協定に基づき、平成20年度には、国際アジア研究所との共催による国際ワークショップの開催や、フランス高等研究所からの研究者の受け入れ、ワークショップ開催などの事業を実施しました。また、英国芸術・人文リサーチ・カウンシルとの協定に基づき、平成21年度からは英国の大学院学生を各機関で受け入れます。

今後も各機関の国際連携活動を推進するとともに、上記以外の国や研究機関も視野に入れた国際連携協力の方策を検討していきます。

連携研究

日本の近代以降、人文科学の最大の研究機関となった人間文化研究機構には、混迷する21世紀の文明と歴史に対して、新たな人間文化研究のパラダイム転換が求められています。機構が緩やかな結合ながらそれぞれに特質のある5つの研究機関で構成されていることこそが、それを可能にする潜在力であると考えられます。機構発足時からそのための模索は続き、機関や機構を超えて組織された

「連携研究」はひとつの試行的な研究でありました。第1期中期計画・中期目標の主要な研究であった「連携研究」を、どのように第2期中期計画・中期目標に発展的につなげていくのか、今後の大きな課題です。

機構を構成する5つの大学共同利用機関はそれぞれの分野における研究のセンター的な役割を担ってきました。個別の大学では扱えない研究資料群を重点的に収集・整理・調査・研究し、全国の研究者の利用に供してきたことは各機関が担う最大の役割のひとつです。各機関は個別に大学共同利用機関として内外の多くの研究者との共同研究を行ってきました。この各機関が培ってきた研究基盤と成果を有機的に結合させて、それをさらに高次なものに発展させる目的で「連携研究」は意図されてきました。

連携研究テーマ「日本とユーラシアの交流に関する総合的研究」は、日本とユーラシア、とりわけアジアとの交流およびその歴史的様相について、各機関の研究の蓄積を結合させ、機構外の研究者との協業も図りながら、総合的に研究を行うことで、人間文化研究の新たな領域の創成を目指しています。平成21年度が最終年度で成果の取りまとめを行います。

平成20年度連携研究

【日本とユーラシアの交流に関する総合的研究】

ユーラシアと日本：交流と表象

(国立歴史民俗博物館：久留島浩)

- ・国際シンポジウム「ユーラシアと日本 パフォーマンスと文化—ユーラシアと日本における交流と表象」／国立歴史民俗博物館(平成21年3月28～29日)

移民史の比較研究

- ・サハリン国際シンポジウム「サハリン—辺境植民の歴史的経験」／サハリン国立大学(平成20年5月6～7日)
- ・第3回未帰還研究学術シンポジウム「解放後海外韓人の犠牲と未帰還」(主催：国民大学校韓国学研究所主催、後援：韓国学術振興財団・国民大学校)／堤岩里3・1運動殉国記念館(平成20年8月7日)
- ・沖縄シンポジウム「沖縄からの移民・再考—旧植民地・勢力

- 圏への移民を中心として」／沖縄大学(平成21年3月18日)
- ・資料調査／石垣市立八重山博物館(平成21年3月19日)

国民国家の比較的研究

- ・国際シンポジウム「19世紀後半から20世紀初頭におけるベトナム・ナショナリズムと国民国家構想の形成」／ハノイ人文社会科学大学(平成20年9月10日)
- ・国際シンポジウム「国民国家形成期の民衆運動と政治文化」(共催：アジア民衆史研究会)／明治大学(平成20年11月29日)

日本周辺海域における物資と情報の往来

- ・サイエンスカフェ／奄美文化センター(平成20年9月18日)
- ・交流研究会「集団・エスニシティ・国家」／同志社女子大学(平成20年11月29日)
- ・研究交流会「十三湊の機能と意義：東北の武士団と中世蝦夷の動向」／中泊町立博物館、市浦整理事務所(平成21年2月20～22日)

中国南北の国境地域における人の移動と交流、および国家政策

- ・国際シンポジウム「中国南北の国境地域における人の移動と交流、ネットワーク、文化の動態」／雲南大学(平成20年9月2～3日)
- ・研究会／国立民族学博物館(平成21年2月28日)

ユーラシアにおける音楽・芸能の交流とイメージ

- ・研究会／明治大学(平成20年4月26日)／明治大学(平成20年11月3日)／国立民族学博物館(平成21年2月28日)
- ・講演会「境界としてのロマ(ジプシー)とその音楽」／大阪大学中之島センター(平成21年3月26日)

● 刊行物

- ・2007年度国際シンポジウム報告書『ユーラシアと日本 いまなぜ国民国家か—国民国家の過去・現在・未来』
- ・2008年度国際シンポジウム予稿集『ユーラシアと日本 パフォーマンスと文化—ユーラシアと日本における交流と表象』
- ・ハノイ・シンポジウム報告書『ベトナムにおける国家と民族』
- ・国際シンポジウム報告書『中国辺境民族的遷徙流動と文化動態』
- ・『トビニタイ文化からのアイヌ文化史』

■ 湿潤アジアにおける「人と水」の総合的研究

(総合地球環境学研究所:秋道智彌)

- ・シンポジウム「水のつながりを考える—ふるさと西条のおいしい水を、未来へ」／西条市総合文化会館(平成20年9月15日)
- ・大学改革シンポジウム「鳥海山から考える地域とくらし」／鳥海自然文化館「遊樂里」(平成20年11月15日)
- ・シンポジウム「水と文明」／一橋記念講堂(平成21年2月11日)
- ・第5回世界水フォーラム／イスタンブール(平成21年3月16～22日)

● 刊行物

- ・研究連絡誌『人と水』5号(特集:水と風景)、平成20年9月
- ・研究連絡誌『人と水』6号(特集:水と動物)、平成21年3月

■ 文化の往還(国文学研究資料館:谷川恵一)

- ・国際シンポジウム「オランダと日本—文化的対話の軌跡」／ライデン大学国際会館(平成20年6月16～17日)
- ・第1回例会「距離と時間感覚の比較研究」／国立民族学博物館(平成20年12月8日)
- ・第2回例会「モンゴルの暦と生活—時間意識をめぐる比較文化」／キャンパスプラザ京都(平成21年2月27日)

● 刊行物

- ・文化の往還 News Letter No.3

【文化資源の高度活用】

■ 武士関係資料の総合化—比較史及び異文化表象の素材として—(国立歴史民俗博物館:小島道裕)

- ・第4回日仏シンポジウム「武士像・騎士像と資料—各時代の武士・騎士の認識」／フランス国立伝統民衆芸術博物館(平成20年4月22日)
- ・国際セミナー「ドイツ歴史博物館との対話」／国立歴史民俗博物館(平成20年11月29日)

● 刊行物

- ・国際シンポジウム報告書『武士関係資料の総合化—比較史および異文化表象の素材として』

■ 中世近世の禁裏の蔵書と古典学の研究—高松宮家伝来禁裏本を中心として—(国立歴史民俗博物館:吉岡眞之)

● 刊行物

- ・研究論集『禁裏本と古典学』

■ 「日本実業史博物館」資料の高度活用

(国文学研究資料館:青木睦)

- ・研究展示「日本実業史博物館からのメッセージ—渋沢栄一と算盤×敬三と広告」／国文学研究資料館(平成21年3月2～28日)
- ・最終研究報告会／国文学研究資料館(平成21年3月13～14日)

■ GISを基盤とする考古・歴史民俗・環境情報の高度連携研究(国際日本文化研究センター:宇野隆夫)

- ・国内研究調査／九州国立博物館(平成20年5月8～9日)
- ・国外研究調査／イラン ペルセポリス遺跡(平成20年5月23～28日)
- ・国内研究打合せ／国際日本文化研究センター(平成20年6月13～15日)
- ・国外研究調査／イスラエル テル・レヘシュ遺跡(平成20年8月16～23日)
- ・国外研究調査／ウズベキスタン ダブシア遺跡(平成20年8月26日～9月30日)

■ 東アジア近代史資料の再構築—旧「日中歴史研究センター」所蔵図書を利用して—

(国際日本文化研究センター:合庭惇)

- ・国外研究調査／中国 遼寧図書館(平成20年7月7～12日)
- ・国外研究調査・国際学術検討会／中国 濟南市(平成20年10月14～17日)
- ・国内研究打合せ／人間文化研究機構(平成21年1月23～24日)

■ アイヌ文化の図像表象に関する比較研究—『夷酋列像図』とマンローコレクションのデジタルコンテンツ化の試み—(国立民族学博物館:佐々木史郎)

- ・研究フォーラム「『夷酋列像』と道東アイヌ」／道立北方四島交流センター(平成20年9月27日)
- ・研究打合せ(編集会議)／国立民族学博物館(平成21年3月22～23日)

● 刊行物

- ・研究フォーラム要旨集『「夷酋列像」と道東アイヌ』

有形文化資源の共同利用を推進するための資料管理基盤形成(国立民族学博物館:園田直子)

- 研究会/国立民族学博物館(平成20年11月13日)/国立民族学博物館(平成21年3月18日)

日本コロムビア外地録音のディスコグラフィ的研究(国立民族学博物館:福岡正太)

- 研究会/国立民族学博物館(平成20年7月20日)
- 国際セミナー“The Age of the 78s in East Asia: Sound Recordings and Associative Modernities”/国立台湾大学(平成20年12月12~14日)

連携展示

人間文化研究機構は、膨大な研究資料・情報を収集、調査研究し、そして提供することを共同利用の形態・機能のひとつに掲げています。国立歴史民俗博物館・国立民族学博物館は大規模な展示施設を有し、常設展示・企画展示を行っています。さらに、国文学研究資料館も、平成20年3月に立川の新庁舎に移転し、展示室の公開を開始しました。

大学共同利用機関としては、共同研究をはじめとする種々の研究成果について、刊行物・データベース・講演会・シンポジウムなどに加えて、迅速に学界に展示公開し、あわせて社会連携の推進のために広く国民に供覧することが必要です。機構の連携事業として、各機関の共同研究の成果などを展示公開することは、本機構が有する重要な機能です。そこで、展示形態の一つとして、複数機関が連携して研究成果を公開する「連携展示」を推進しています。

幻の博物館の「紙」 —日本実業史博物館旧蔵コレクション展

平成19年5月28日~6月15日
国文学研究資料館

平成20年1月16日~2月11日
国立歴史民俗博物館

財界人として活躍した渋沢敬三(1896~1963)は、戦前に「近世経済史博物館」の設立を構想し、近世・明治の

資料収集を行いました。この構想は戦後、「日本実業史博物館」として続けられましたが、ついに実現しませんでした。博物館設立のための収集資料は、1962年に、文部省史料館(現、国文学研究資料館)に寄贈されました。展示は、博物館の「製紙」部門に関わる様々な紙資料を公開するもので、機構の連携研究「日本実業史博物館資料の高度活用」の研究成果です。



連携展示ポスター「百鬼夜行の世界」

百鬼夜行の世界

平成21年7月18日~8月30日
国立歴史民俗博物館
国文学研究資料館
国際日本文化研究センター

近年、創造力の文化や精神世界の高まりとともに、その一環として怪異や妖怪画が注目を集め学際的な研究が展開されています。国際日本文化研究センター、国立歴史民俗博物館、国文学研究資料館では、これまで怪異・妖怪に関する共同研究や異界についての企画展示を開催し、関連する資料の収集を行ってきました。その成果を展示します。

研究資源の共有化事業

人間文化研究機構では、人間文化研究総合推進事業の一環として、平成17年度より、5機関の開発した人間文化研究にかかわるデータベースを統合的に検索する研究資源共有化システムの開発を始めました。

平成19年度に、5研究機関(国立歴史民俗博物館、国文学研究資料館、国際日本文化研究センター、総合地球環境学研究所、国立民族学博物館)が提供する100を越えるデータベースを、一括して横断検索することができる「統合検索システム」と、小規模なデータベースを容易に公開できる研究者参加型の「nihuONEシステム」を開発しました。統合検索システムは、平成20年4月

より、nihuONEシステムは平成20年12月から、機構ホームページを通じて、国内外に公開しています。

また、人間文化研究に不可欠な時間(年代・時代など)と空間(地理的位置・地名など)を用いた時空間分析・検索システム「GT-Map/GT-Time システム」の研究開発を進め、「統合検索システム」からも時空間検索システムの基本部分を利用できるようにしました。

研究資源共有化事業委員会と公開研究会

平成20年度からは、「人間文化研究機構研究資源共有化事業委員会」を設置し、情報科学研究の専門領域に関して、機構外の研究者の委員としての参加も求め、事業を推進しています。委員会では、人間文化研究に関

【 資源共有化システムで利用できるデータベース 】

国立歴史民俗博物館

館蔵資料 / 館蔵中世古文書 / 館蔵近世・近代古文書 / 館蔵紀州徳川家伝来楽器 / 館蔵武器武具(実物資料) / 館蔵武器武具(文献史料) / 館蔵錦絵 / 館蔵『懐溜諸屑』 / 館蔵野村正治郎衣裳コレクション / 館蔵染色用型紙 / 館蔵縄文時代遺物 / 館蔵装身具 / 兼頭脚記 / 歴博図書目録 / 日本荘園 / 荘園関係文献目録 / 自由民権運動研究文献目録 / 棟札 / 古代・中世都市生活史 / 江戸商人・職人 / 中世制札(制札) / 中世制札(文献) / 中世地方都市(都市) / 中世地方都市(文献) / 陶磁器出土遺跡(遺跡) / 陶磁器出土遺跡(文献) / 土偶 / 近世窯業遺跡 / 近世窯業関係主要文献目録 / 城館城下発掘(遺跡) / 城館城下発掘(文献) / 弥生石器遺跡(遺跡) / 弥生石器遺跡(図面) / 東国板碑(遺跡等) / 東国板碑(板碑) / 東国板碑(文献) / 民俗誌 / 日本民俗学文献目録 / 宮座研究論文

国文学研究資料館

収蔵アーカイブズ情報 / 吾妻鏡 / 絵入り源氏物語 / 二十一代集 / 日本古典文学本文 / 図書・雑誌所蔵目録 / 近代文献情報(近代書誌・近代画像) / コーニツキー版 欧州所在日本古書総合目録 / 古筆切所収情報 / 「史料所在情報・検索」システム / 館蔵和古書画像 / 『古事類苑』 / 新奈良絵本画像 / 歴史人物画像 / 国文学論文目録 / 近代文献情報(明治期出版広告) / 史料情報共有化 / 和刻本漢籍総合 / 館蔵神社明細帳 / 連歌・演能・雅楽 / 古典学統合百科(伝記解題) / 古典学統合百科(地下家伝・芳賀人名辞典) / 日本古典籍総合目録 / アーカイブズ学文献

国際日本文化研究センター

貴重書 / 西洋医学史古典文献(野間文庫) / 宗田文庫図版資料 / 日本研究機関 / 絵巻物 / 怪異・妖怪絵姿 / 近世風俗図会 / ちりめん本 / 米国議会図書館所蔵奈良絵本 / 平安京都名所図会 / 平安人物志短冊帖 / 平安人物志 / 米国議会図書館所蔵浮世絵 / 都年中行事画帖 / Japan Review / 日文研フォーラム報告書 / 日本研究 / 於竹大日如来縁起絵巻 / 怪異・妖怪伝承 / 季語検索 / 近世崎人伝(正・続) / 考古学GIS / 図録 米欧回覧実記 / 錦絵観音霊験記の世界 / 俳諧 / 連歌 / 和歌 / 在外日本美術 / 日本関係欧文図書目録 / 所蔵地図

総合地球環境学研究所

世界地図 / 所蔵図書 / 西表文献 / 映像資料

国立民族学博物館

標本資料目録 / 標本資料詳細情報 / 図書目録 / 雑誌目録 / 中西コレクション / 身装文献 / 衣服・アクセサリ / 音楽・芸能の映像

【 nihu ONE システムで公開されているデータベース 】

アーカイブズ学文献 / 縄文集落 / 縄文集落文献 / 生態史写真資料 / 生態史文献資料 / 梅棹忠夫著作目録

わる学界の諸機関、研究者を連携した資源共有化環境の構築の研究を進めるために、平成20年度に「人間文化に関わる情報資源共有化研究会」を開催しました。

委員会では、さらに平成21年度から、学界に広く呼びかけて、公開の人間文化研究情報資源共有化研究会を開催することとしました。

人間文化に関わる情報資源共有化研究会

第1回 平成20年12月15日

情報・システム研究機構 会議室

報告：「資源共有化事業・統合検索システムについて」（安達文夫）、「資源共有化事業・時空間システムについて」（柴山守）、「日本学術会議地域研究委員会提言「地域の知」について」（岡部篤行・浅見泰司）、「京都大学人文科学研究所における情報資源研究」（安岡孝一）、「東京大学史料編纂所の情報資源研究」（横山伊徳）、「情報資源共有化推進にあたっての考慮点」（石川徹也）

第2回 平成21年1月19日

情報・システム研究機構 会議室

報告：「人間文化研究機構資源共有化事業の第2期の展開について」（石上英一）、「国立国語研究所のデータベースについて」（前川喜久雄）、「国立国会図書館のデジタルアーカイブ事業とPORTA」（大場利康）、「国立情報学研究所における統合的情報検索へのアプローチ」（安達淳）

人間文化研究情報資源共有化研究会

第1回 平成21年5月29日

国文学研究資料館 5階機構会議室

テーマ：人間文化研究における研究情報資源共有化の展開と展望

知的財産

人間文化研究機構では、機構の知的財産の創出・取得・活用に戦略的に取り組んでおり、機構を構成する各

機関でもまた、研究・教育の過程において創出・獲得された知的財産を管理・運用するだけでなく、積極的に社会に還元するための体制を整備してきました。

本機構では、機構としてのデータベースに加えて、各機関独自にも研究支援のための数多くのデータベースを構築してきており、インターネットなどを通じて公開しています。また、機構に設けられた知的財産管理室を中心として、各機関それぞれ、あるいは機構全体として所蔵する資料・写真等の熟覧・貸与、著作物の使用許諾など、知的財産の効率的な管理・運用を推進しています。

さらに、知的財産管理室では各種セミナー等を開催して、知的財産について広く研究者の理解がおよぶための周知策も講じています。

人間文化研究機構知的財産セミナー

平成19年度までに実施したセミナー等の実施事業

第1回「著作権をはじめとするさまざまな知的財産関係の具体的事例、疑問等に関する質疑応答」

講師：藤川義人（弁護士・弁理士、淀屋橋・山上合同法律事務所）

第2回「情報共有化時代の著作権」

講師：野口祐子（弁護士、クリエイティブコモンズ・ジャパン事務局長／森・濱田・松本法律事務所）

第3回「文化資料の利用と著作権」

講師：尾崎史郎（独立行政法人メディア教育開発センター教授、元文化庁著作権課マルチメディア著作権室長）

第4回「知的財産に関する基礎知識」

講師：佐田洋一郎（国立大学法人山口大学教授、知的財産本部長）

平成20年度セミナー等の実施事業

第5回「写真・映像による研究成果公開と著作権・肖像権」

平成21年3月16日（月）

人間文化研究機構本部

講師：岸本織江（横浜国立大学大学院国際社会科学研究所准教授）

講演会・シンポジウム

人間文化研究機構では、国立歴史民俗博物館、国文学研究資料館、国際日本文化研究センター、総合地球環境学研究所、国立民族学博物館という専門を異にする5つの研究機関が結ばれたメリットを生かし、より新しく、より幅の広い人文科学の創出をめざすとともに、さまざまな研究活動を展開しています。これによって得られた学問的成果を広く知っていただくために、定期的に公開講演会・シンポジウムを開催します。

講演会・シンポジウムの内容は広報誌『人間文化』に掲載し公開しています。

人間文化研究機構設立記念公開講演会・シンポジウム

「今なぜ、人間文化か」

平成16年9月25日

一橋記念講堂

人間文化研究機構第2回公開講演会・シンポジウム

「歩く人文学—人文学と社会の新しい関係」

平成17年6月25日

大阪国際会議場

人間文化研究機構第3回公開講演会・シンポジウム

「人が創った植物たち」

平成17年10月6日

有楽町朝日ホール

人間文化研究機構第4回公開講演会・シンポジウム

「人はなぜ花を愛でるのか？」

平成18年5月27日

国立京都国際会館

人間文化研究機構第5回公開講演会・シンポジウム

「人は、どんな手紙を書いたか—近代日本とコミュニケーション」

平成18年9月30日

一橋記念講堂

人間文化研究機構第6回公開講演会・シンポジウム

「世界に広がる日本のポップカルチャー—マンガ・アニメを中心として」

平成19年6月2日

有楽町朝日ホール

人間文化研究機構第7回公開講演会・シンポジウム

「国際開発協力へのまなざし—実践とフィールドワーク」

平成19年11月30日

I M Pホール

人間文化研究機構第8回公開講演会・シンポジウム

「新しい近世史像を求めて」

平成20年6月8日

東商ホール

人間文化研究機構第9回公開講演会・シンポジウム

「源氏物語の魅力」

平成20年10月13日

有楽町朝日ホール

人間文化研究機構第10回公開講演会・シンポジウム

「百鬼夜行の世界」

平成21年7月11日

有楽町朝日ホール



第10回公開講演会・シンポジウム「百鬼夜行の世界」ポスター



広報誌「人間文化」Vol.8



広報誌「人間文化」Vol.9

地域研究推進事業

人間文化研究機構は、わが国にとって学術的、社会的に重要な意義を有する地域の文化、社会を、総合的に理解、解明するため、関係大学・機関と協力して、平成18年度から、「地域研究推進事業」を開始しました。

事業の実施方式

本事業は、関係大学・機関と研究拠点を共同設置し、拠点間のネットワークを構築して、研究を推進する新しい方式の研究事業です。

対象地域は、学識経験者で構成する「地域研究推進委員会」において、「イスラーム地域」、「現代中国」および「現代インド」を選定しました。まず「イスラーム地域」について、研究基本計画と研究計画を策定して研究体制を整備し、すでに平成18年度から研究を進めています。「現代中国」についても研究基本計画と研究計画を策定して研究体制を整備し、平成19年度から研究を開始しています。「現代インド」については、平成22年度からの研究開始に向け研究体制整備に着手しています。

イスラーム地域研究の推進

イスラーム地域研究は、以下のとおり関係大学・機関と共同で研究拠点を設置し、早稲田大学に設置した「現代イスラーム地域研究センター」を中心にネットワークを構築して、研究を進めています。

早稲田大学イスラーム地域研究機構イスラーム地域研究所「現代イスラーム地域研究センター」

- ・総括責任者：佐藤次高（早稲田大学イスラーム地域研究機構長・文学学術院教授）
- ・中心テーマ 「イスラームの知と文明」

東京大学大学院人文社会系研究科附属次世代人文学開発センター「イスラーム地域研究部門」

- ・総括責任者：小松久男（東京大学大学院人文社会系研究科長・次世代人文学開発センター流動教員）
- ・中心テーマ 「イスラームの思想と政治：比較と連関」

上智大学アジア文化研究所「イスラーム地域研究拠点」

- ・総括責任者：私市正年（上智大学外国語学部教授）
- ・中心テーマ 「イスラームの社会と文化」

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科「附属イスラーム地域研究センター」

- ・総括責任者：小杉泰（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科教授）
- ・中心テーマ 「イスラーム世界の国際組織」

財団法人東洋文庫研究部「イスラーム地域研究資料室」

- ・総括責任者：三浦徹（お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科教授、東洋文庫研究員）
- ・中心テーマ 「イスラーム地域研究史資料の収集・利用の促進とイスラーム史資料学の開拓」

現代中国地域研究の推進

現代中国地域研究は、以下のとおり関係大学・機関と共同で研究拠点を設置し、早稲田大学に設置した「現代中国研究所」を中心にネットワークを構築して、研究を進めています。

早稲田大学アジア研究機構「現代中国研究所」

- ・総括責任者：毛里和子（早稲田大学政治経済学術院教授）
- ・中心テーマ 「中国の発展の持続可能性」

京都大学人文科学研究所「附属現代中国研究センター」

- ・総括責任者：森 時彦（京都大学人文科学研究所教授）
- ・中心テーマ 「人文学の視角から見た現代中国の深層構造の分析」

慶應義塾大学東アジア研究所「現代中国研究センター」

- ・総括責任者：国分良成（慶應義塾大学法学部長）
- ・中心テーマ 「中国の政治的ガバナンス」

東京大学社会科学研究所「現代中国研究拠点」

- ・総括責任者：田嶋俊雄（東京大学社会科学研究所教授）
- ・中心テーマ 「中国経済の成長と安定」

人間文化研究機構総合地球環境学研究所「中国環境問題研究拠点」

- ・総括責任者：窪田順平（総合地球環境学研究所准教授）
- ・中心テーマ 「開発による文化・社会と環境の変容」

財団法人東洋文庫「現代中国研究資料室」

- ・総括責任者：高田幸男（明治大学文学部教授、東洋文庫研究員）
- ・中心テーマ 「現代中国研究資料の収集・利用の促進と現代中国資料研究の推進」

各機関の活動



国立歴史 民俗博物館

NATIONAL MUSEUM OF JAPANESE HISTORY



国立歴史民俗博物館全景

概要

国立歴史民俗博物館(歴博)は、昭和56年(1981)に大学共同利用機関として、設置されました。

歴博は、歴史・考古・民俗および情報資料の4研究系による学際的・総合的な協業に基づく研究を進めてきました。博物館は学術資料、情報の収集、整理、保存、調査研究そして提供という一連の機能を有することを最大の特色としています。そこで、博物館という形態を活かした新しい研究スタイル「博物館型研究統合」を提唱することにしました。「博物館型研究統合」とは、〈資源〉〈研究〉〈展示〉という3つの要素を有機的に連鎖させ、さらにそれらの要素を国内外の人々と幅広く〈共有・公開〉することによって、博物館という形態を最大限に活かした研究を推進することです。

また、歴博の重要な役割は歴史資料・情報の収集、整理、保存、調査研究そして提供(展示・出版、情報データベースなど)という一連の機能を、大学共同利用機関として国内外の研究者が存分に共同利用できることにあり、あわせて研究活動を通じて次代を担う研究者を育成することです。

その機能のうちでも展示は、歴博にとってきわめて意義ある事業のひとつです。開館以来26年を経た今、現状の総合展示は研究の進展を十分に反映しておらず、また、国際化および一般市民の知的需要にも応えきれない

ないということなどからリニューアルの要請が年々高まってきました。このような急激に変化する現代社会の要請に応えるためには、最新の研究成果を反映した総合展示の見直しが不可欠であり、新たに総合展示の全面的な新構築を実現する必要があります。そこで、総合展示リニューアル基本構想に基づき、国内外の研究者による展示プロジェクト委員会を組織し、十分に検討を行い、ようやく平成20年3月第3展示室(近世)をオープンし、現在、平成22年3月第6展示室(現代)のオープンに向けて準備しています。

研究

歴博では、全国の大学、研究所等の研究者の参画を得て、専門を異にする複数の研究者が共通の研究課題のもとにプロジェクトを組織し、共同研究(基幹研究・基盤研究・個別共同研究)を実施しています。基幹研究は、大きな研究課題のもとに学際的研究をめざす課題を設定したものであり、基盤研究は、収集資料の高度情報化や、新しい歴史研究の方法論的基盤を作るための課題を設定しています。この2つを「共同研究」の核とすれば、個別共同研究は、歴史学・考古学・民俗学ならびに関連諸科学に固有な課題や、今後発展する萌芽的課題を設定し、共同研究全体を裏切るものとする役割を担っています。それぞれの平成21年度における研究テーマは次のとおりです。

基幹研究

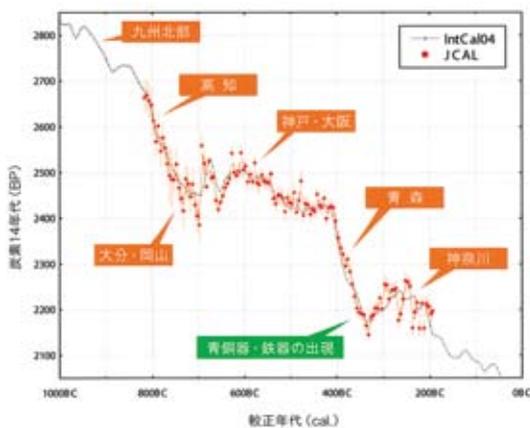
- 20世紀に関する総合的研究Ⅱ
- 列島における生活誌の総合的研究
- 交流と文化変容に関する史的研究
- 新しい古代像樹立のための総合的研究

基盤研究

- 科学的資料分析研究
- 総合的年代研究
- 高度歴史情報化研究
- 博物館学的研究

個別共同研究

● 東アジア先史時代の定住化過程の研究



日本各地における水田稲作の開始時期の推定

共同利用

【資料収集等】

歴博では、実物資料・複製資料・音響映像資料およびこれに関連する資料を計画的・継続的に収集しており、平成21年4月現在、221,815点（うち国宝5点、重要文化財85点、重要美術品27点）を収蔵しています。また、蔵書冊数は294,660冊となっています。

【情報提供】

研究報告書の刊行

共同研究などの成果は『国立歴史民俗博物館研究報告』として刊行するとともに、研究情報を網羅した『国立歴史民俗博物館年報』、さらに歴史系総合誌『歴博』『展示図録』『資料目録』などを刊行しています。

データベースの公開

収蔵資料を広く公開し、研究利用に資することを目的とした館蔵資料データベースと諸分野の文献目録や共同研究の成果を収録したデータベース、記録類の全文データベース（平成21年3月末現在43本）を提供しています。

資料閲覧

研究者を対象とした資料閲覧（熟覧）の他に、近世・近代文書の実物またはマイクロフィルムと館蔵資料のマイクロフィルム紙焼製本（一部）の即日閲覧を実施しています。対象資料は順次追加しています。また、歴博が制作した民俗研究映像資料のDVDの貸出による閲覧も実施しています。



研究会風景

【展示】

総合展示

歴博の総合展示（常設）は、民衆の生活史に重点を置いて構成し、5つの展示室に分かれています。第1展示室から第3展示室では、原始・古代から中世を経て近世に至る歴史を時代順に配置し、第4展示室では民俗世界を、第5展示室では近代のテーマを配置しています。

これらに加え今年度は総合展示の新構築として、平成22年3月16日に第6展示室「現代」を開室します。1930年代から1970年代の生活と文化、それらを取り巻く社会や世界の動きについて、「戦争と平和」「戦後の生活革命」というふたつのテーマのもとに、当時の生活用品や出版物、映画・CM・ニュース映像等を用いて紹介します。また、開室から1年間は「人びとの移動」をテーマにした展示も行います。

平成20年3月にリニューアルオープンした第3展示室「近世」では、企画展示室仕様の3つの副室において、ボランティアを導入して運営する体験コーナー「寺子屋 れきは

く」や、館蔵実物資料を中心にしたミニ企画展示を開催しています。今年度は4回のミニ企画展示を予定しています。特に人間文化研究機構連携展示として国文学研究資料館および国際日本文化研究センターとの共催による「百鬼夜行の世界」では、「百鬼夜行絵巻」を中心に取り上げ、その発生と展開、影響関係を体系的に展示し、最新の研究成果を国内外に発信します。歴博会場では、真珠庵本を中心とした初期の百鬼夜行絵巻の系譜を追った展示を行います。

「錦絵に見る江戸の料理茶屋」
平成21年4月14日～6月21日

「百鬼夜行の世界」
平成21年7月18日～8月30日

「金箔と刺繍のきらめき—慶長小袖」
平成21年9月15日～12月13日

「和宮ゆかりの雛かざり」
平成22年2月9日～3月7日



総合展示 第2展示室「貴族の服装 冬の料」



総合展示 第3展示室 体験コーナー「寺子屋 れきはく」

企画展示

共同研究プロジェクトおよび資料収集の成果を公開する方法のひとつとして、企画展示があり、平成21年度は3回の開催を予定しています。

「錦絵はいかにつくられたか」
平成21年2月24日～5月6日

「日本建築は特異なのか—東アジアの宮殿・寺院・住宅」
平成21年6月30日～8月30日

「縄文はいつから!?—1万5千年前になにがおこったのか」
平成21年10月14日～平成22年1月24日



企画展示「旅—江戸の旅から鉄道旅行へ」

くらしの植物苑

平成7年に開設された「くらしの植物苑」では、生活文化を支えてきた植物を系統的に植栽し、「食べる」「織る・漉く」「染める」「治す」「道具をつくる」「塗る・燃やす」のテーマで、植物を通じてくらしの歴史を展示しています。また、特別企画「季節の伝統植物」として伝統的に栽培された園芸植物等に関する展示を今年度は4回開催します。

「伝統の桜草」
平成21年4月21日～5月10日

「伝統の朝顔」
平成21年8月4日～8月30日

「伝統の古典菊」
平成21年11月3日～11月29日

「冬の華・サザンカ」
平成21年12月1日～平成22年1月31日



くらしの植物苑特別企画「伝統の朝顔」

社会連携

歴博では共同研究などの成果を展示という形だけでなく、さまざまな普及活動を通じて社会に還元しています。

【歴博フォーラム・講演会の開催】

研究成果を広く一般に公開するための「歴博フォーラム」と「歴博講演会」を開催しています。

【子ども向け教育普及事業の実施】

歴博の展示や研究活動を家族向けにわかりやすく解説したり、バックヤードの見学を主とした「歴博探検」や設問にしたがって資料を観察しながら展示室をめぐる「れきはくどもワークシート」など、子ども向けの教育普及活動を実施しています。



歴博探検(調査室)風景

【専門職員研修事業などの実施】

平成5年度から、歴史民俗系資料館の活動の充実に資するため、文化庁と共催で全国の歴史民俗系博物館・資

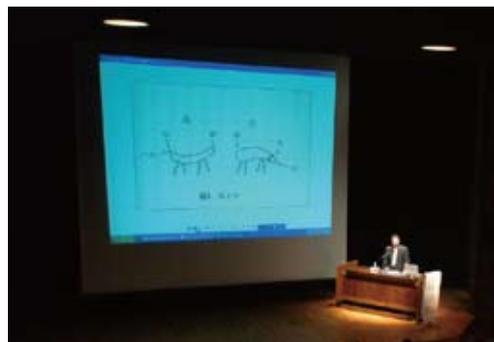
料館の専門職員を対象に「歴史民俗資料館等専門職員研修会」を開催しています。

【歴博の紹介】

全国生涯学習フェスティバルなどにおいて歴博紹介を積極的に実施しています。

【研究交流】

海外の大学・研究機関・博物館と学術交流をめざし、平成20年度までに7件の交流協定を締結しています。



歴博フォーラム「牛と丑ー歴史と民俗」

大学院教育

平成11年度から総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻が置かれています。個別授業・基礎演習・集中講義の3つの形態の授業を行い、博士論文の作成指導と研究者としての能力の育成を図り、歴史学・民俗学・考古学・分析科学などの多分野にわたる研究者による複数教員の指導と基盤機関に所蔵されている実物資料の活用などをおし、広い視野を持った創造性豊かな研究者の育成を行っています(平成21年5月1日現在、在学生31名)。

大学院教育の協力の一環として、特別共同利用研究員制度を平成9年度から設けており、大学の要請に応じ歴史学・考古学・民俗学およびそれに関連する分野を専攻する大学院学生を受け入れ、必要な指導を行っています(平成21年度5月1日現在3名)。

各機関の活動



国文学研究資料館

NATIONAL INSTITUTE OF JAPANESE LITERATURE



国文学研究資料館 本館正面入口

概要

国文学研究資料館は、文献資料の調査研究、収集、整理および保存等を目的として、昭和47年(1972)に設置されました。以来、大学等の研究者の協力を得ながら、国内外に所在する日本文学およびその周辺の資料について調査し、マイクロフィルム等による収集を行い、保存に努めています。また、集積した資料や情報は、閲覧、複写サービス、インターネット等によるサービスを通じ、広く研究者および一般利用者に提供しています。

同時に、調査、収集した膨大な書誌情報を活用し、文学研究を基礎、総合および応用にわたって体系的、総合的に展開させるべく基幹研究、研究プロジェクトを企画し、推進しています。それらは、大学等の研究者と連携し、多面的な共同研究として実施しています。また、海外の研究機関、研究者との交流にも積極的に取り組んでいます。その他、展示、講演会、ワークショップ等を通じて、日本文学およびその周辺の文化資源の活用を図り、社会との連携を図っています。

また、平成20年3月に品川区から立川市緑町に移転しました。今後、拡充した閲覧室や展示室等を活用して、共同利用機関としてより充実した活動を展開していきます。

研究

国文学研究資料館では4つの研究系でプロジェクト研究を共同研究として行うほか、平成18年度から新たに全館的に取り組む基幹研究を開始しました。

【基幹研究】

創立以来当館が培ってきた、日本文学に関する原本資料の調査収集の成果を基盤として継承し、体系的な調査収集計画に基づいて行う総合研究で、以下3研究課題を実施しています。

- 王朝文学の流布と継承
- 19世紀における出版と流通
- 陽明文庫における歌合資料の総合的研究

【文学資源研究系】

書籍形態の文学資源に関し、原本調査に基づいた総合研究を行います。書誌情報の集積と分析、書籍の形態の内容の考究、目録の作成、解題の作成などの基礎研究を通じ、文学資源が有する日本文学としての資料的特質を明らかにします。

- 日本古典籍特定コレクションの目録化の研究
- 和刻本(五山版・近世初期刊本)の研究
- 学芸書としての中世類題集の研究—『夫木和歌抄』を中心に
- 近世後期小説の様式的把握のための基礎研究

【文学形成研究系】

日本文学の個々の作品や作品群を対象に、作品形成という観点を軸として、本文の調査によって作品の成立、表現、享受等に至るさまざまな問題を総合的に研究し、日本文学の作品的特質を明らかにします。

- 平安文学における場面生成研究—物語の生成と受容
- 古典形成の基盤としての中世資料の研究
- 近世文芸の表現技法〈見立て・やつし〉の総合研究

【複合領域研究系】

文学作品群の多角的な分析を行うことによって、学際的な研究領域の開拓を目指すとともに、そうした研究を一体となって支える、文化資源情報の電子化および共有化に関する研究を行います。

- 開化期戯作の社会史研究
- 日本文学関連電子資料の構成・利用の研究

【アーカイブズ研究系】

古文書から電子記録まで多様に存在するアーカイブズ資源に関する総合的研究を行い、日本のアーカイブズの特質の解明およびその保存、活用のための技法・理論を確立することを目的とし、さらにアーカイブズ情報を社会化するためのシステム研究を推進します。

- 経営と文化に関するアーカイブズ研究
- 東アジアを中心としたアーカイブズ資源研究
- アーカイブズ情報の資源化とネットワークの研究

このほか、公募による共同研究「近世風俗文化学の形成—忍頂寺務草稿および旧蔵書とその周辺」「久世家文書の総合的研究」を実施します。



歌川豊国画
「擬五行尽之内 王位を望む木
大伴黒主」(嘉永5年)



御伽草子「大黒舞」より 福神たちが盗族を追い払う場面
(江戸前期写、奈良絵本)



「源氏物語団扇画帖」より第5回「若紫」(江戸前期)



古活字本「徒然草」(慶長初期刊)

共同利用

【資料閲覧サービス】

収集し整理した資料については、閲覧室において来館利用者への閲覧・複写サービス等を行っており、図書館間の相互利用制度により、遠隔地の利用者へも資料の複写等のサービスを行っています。

【公開データベース等】

「国文学論文目録データベース」「日本古典籍総合目録」を始め、計27のデータベースによる学術情報の提供を行っています。

【展示】

通常展示

「和書のさまざま―書誌学入門」

平成21年4月27日～6月19日

本展示では、《本》のさまざまな形態を体系的に紹介しながら、日本の古典籍がどのように読み伝えられてきたのかを追った展示をします。



「魚貝譜」の版木と版本(享和2年刊)

人間文化研究機構 連携展示

「百鬼夜行の世界」

平成21年7月18日～8月30日

国立歴史民俗博物館、国際日本文化研究センターと共催で、これまで怪異・妖怪に関する共同研究や異界についての企画展示を開催し、関連する資料の収集を

行ってきました。今回、「百鬼夜行絵巻」を中心に取り上げ、その発生と展開、影響関係を体系的に展示し、最新の研究成果を国内外に発信することを目的とし、開催します。

特別展示

「江戸の長編読みもの ―読本・実録・人情本」

平成21年9月25日～10月23日

本展示では、主として江戸時代後期(19世紀前半)に流布した〈後期戯作〉のうち、読本・実録・人情本の3ジャンルを取り上げ、当館の研究プロジェクトの成果として展示を行います。

「物語の生成と受容」

平成21年11月9日～11月23日

当館の「平安文学における場面生成研究プロジェクト」では、平安時代の物語文学を主たる対象として、物語はどのように作られていくのかという生成の問題と、物語はどのように受け継がれていくのかという受容の問題を研究してきました。本展示では、本研究プロジェクトの研究成果にのっとった視点で、平安物語に関連する作品を体系的に展示します。

「江戸の絵本と歌仙絵」

平成22年1月8日～2月5日

百人一首、三十六歌仙の歌仙絵を基本に、歌人、狂歌師、俳諧師、遊女、武者、役者、職人などの描画における、モチーフとしての歌仙絵のあり方を幅広くとらえ、江戸の絵本を中心に、その画像の展開と変容を跡づけることを目的に展示します。

社会連携

【国際日本文学研究集会】

国内外の日本文学研究者の交流を深め、日本文学研

究の発展を図るため、毎年秋に開催しており、平成21年度は11月28・29日に「語られる人称・なぞらえる視点」というテーマで開催します。

【日本古典籍講習会】

国内外で日本の古典籍を扱っている図書館や文庫の司書を対象とし、古典籍の基礎知識・取り扱い等に関する講習会を開催します。講師は、当館教員および司書ならびに国立国会図書館司書等で、平成22年1月に当館および国立国会図書館で開催します。

【アーカイブズ・カレッジ】

記録史料の保存と利用サービス等の業務を担う専門職員（いわゆるアーキビスト）の研修、養成のため、長期コースと短期コースを開催します。講師は当館教員等で、長期コースは7月～9月の間の計8週間、国文学研究資料館で開催し、平成21年度の短期コースは佐賀大学（佐賀市）において11月9～20日に開催を予定しています。



アーカイブズ・カレッジ

【子ども見学デー】

文部科学省の働きかけにより実施している「子ども見学デー」の一環として、平成21年度は8月4日に開催を予定しています。



子ども見学デー

【サテライト講座】

都心の会場で、当館の教員が一般向けの講座を行います。平成21年度は11月頃に「王朝文学の世界（仮題）」と題して開催する予定です。

大学院教育

国文学研究資料館には、総合研究大学院大学の文化科学研究科（日本文学研究専攻）が設置されています。総合研究大学院大学は、大学共同利用機関等の人材と研究環境を基盤として、教育・研究を行っています。日本文学研究専攻では、従来の日本文学研究を、文化科学の視点から総合的に捉え直す立場に立って、多面的な指導をしています（平成21年5月1日現在、在学生12名）。

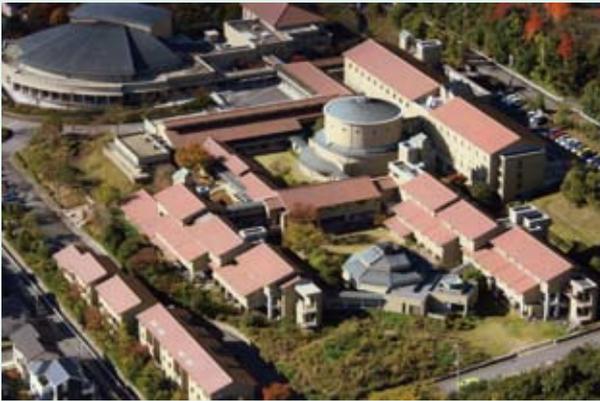
また、特別共同利用研究員制度により、大学の要請に応じ大学院学生を受け入れ、研究指導に協力しています（平成21年5月1日現在4名）。



各機関の活動

国際日本文化 研究センター

INTERNATIONAL RESEARCH CENTER FOR JAPANESE STUDIES



国際日本文化研究センター全景

概要

国際日本文化研究センター(日文研)は、日本文化に関する国際的・学際的な総合研究と世界の日本研究者に対する研究協力・支援を行うことを目的として、昭和62年(1987)に設置されました。以来、日本文化の独自性の研究のみならず、諸外国との文化比較や文化交流の視点をも重視し、国内外から参加するさまざまな専門領域の共同研究員による分野横断的な、日本文化に関する多様な研究を展開しています。

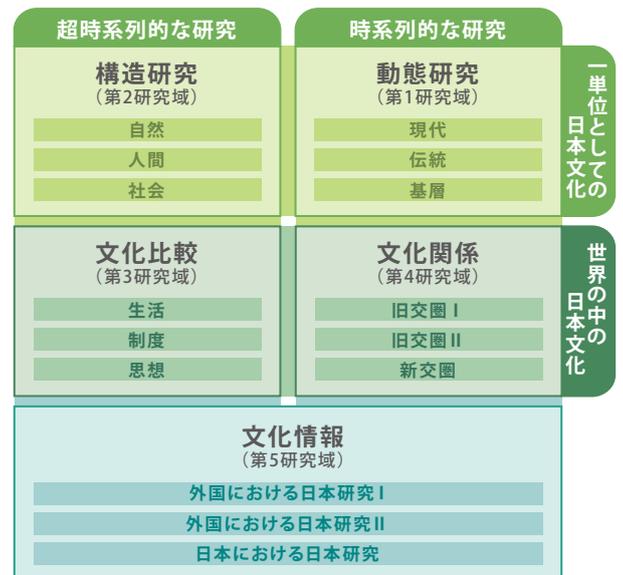
研究部門制を採用していない日文研では、共同研究を研究域・研究軸という枠組みのもとに位置づけ、特定の分野に偏らない、バランスのとれた共同研究を推進しています。その研究成果は、和文・英文による図書・学術雑誌、講演会、シンポジウムなどさまざまな形で、国内のみならず広く海外に提供しています。

研究協力としては、世界各地の日本文化の研究者・研究機関に、研究情報を発信するとともに、地域の実情に応じて日文研のスタッフを派遣して研究会を開催するなど、多面的な研究協力活動を行っています。

また、総合研究大学院大学文化科学研究科国際日本研究専攻・博士後期課程では、次代の日本研究者養成を行っています。本専攻では、留学生も受け入れています。

研究

日文研における研究活動は、研究域・研究軸という枠組みのもとに行われています。この枠組みの原則は、日本文化の全体像を把握するための視座としてまず研究域を設け、次にその研究域を分節し、それぞれの研究域にいくつかの方向を特定するものとして研究軸を設ける、という形をとっています。



【共同研究】

日文研がもっとも力を入れているのは、共同研究方式の日本文化の研究です。日本文化を研究するためには、関係する個別専門分野ごとの成果が着実に積み重ねられなければなりません。あわせて専門分野の枠組みを越えて、研究者が相互に知見を高めあう場が必要になります。こうした共同研究の場は、総体として日本文化理解の促進に大きな役割を果たすものと期待されます。また、共同研究では、日本と異なる知的伝統に立つ海外の研究者との交流をも重視しています。さらに、国際化時代といわれる今日、日本文化研究の多角的な国際化を図ることで、時代の要請に応えようとするものです。

このように、日文研における共同研究は、単なる研究成果の交流にとどまるものではなく、専門分野および知的伝統を異にする研究者たちが研究過程を共有し合うことによって生みだされる創造性に基づく成果をめざしています。平成21年度は、15の課題による共同研究が行われています。



共同研究会

研究協力

日文研では、日本文化に関する国際的・学際的な総合研究を行い、世界に開かれた国際的なセンターとしての責務を果たすため、諸外国から外国人研究者を受け入れています(平成21年4月1日現在、累計世界41か国、452名)。これら外国人研究者と日文研の教員や国内研究員との親密な学問的交流は、世界の日本研究促進の基盤となっています。

また日文研では、日本研究を行っている研究者を対象に研究協力活動を展開しています。この活動は、個々の研究者の研究交流を目的とする国際研究協力と、日文研が蓄積してきた研究情報の提供に大別することができます。

具体的には、研究会形式の研究交流を行う場の提供や、個人的な研究上の協力として研究相談などを実施しています。

【国内開催の研究会】

- 「日文研フォーラム」は、来日中の外国人研究者による研究発表と交流の場の提供を目的に、毎月開催しています。

テーマは日本文化に関連したもので1回で完結する形をとっています。この研究会は一般にも公開されています。



日文研フォーラム成果出版物

- 「セミナー」「レクチャー」「シンポジウム」は、日文研の教員が専門領域のテーマを設定して開催するもの、および来日中の外国人研究者と日文研の教員が共同・協力して学際的なテーマを設定して開催するものがあり、研究者との交流をも目的とします。
- Nichibunken Evening Seminarは、外国人研究者の研究発表と国際交流を兼ねた英語によるセミナーです。

【海外シンポジウム】

平成7年度から海外においても研究活動・研究協力活動を行うため、年1回海外シンポジウムを実施しています。

平成20年度は、サンパウロ大学において「日本・ブラジル文化交流—言語・歴史・移民」を実施しました。平成21年度はジャワハルラル・ネルー大学(インド)で行う予定です。

【海外における日本研究会】

平成11年度から、海外研究交流室を中心に教員を年数回海外に派遣し、訪問した地域の日本研究者と協力して、現地の研究動向に即したテーマで小規模な研究会を開催しています。あわせて、研究相談等支援業務を行っています。この研究会は、日文研の設置目的である国際研究協力活動をより積極的かつ効果的に行うこ

とをめざしています。開催地の優秀な若手研究者の発掘につながることに加え、海外の日本研究の生の情報を得る貴重な機会にもなっています。

平成20年度は、ハノイ大学(ベトナム)にて開催しました。平成21年度はインドネシア大学(インドネシア)で行う予定です。

【海外研究交流シンポジウム】

平成18年度から、海外の日本研究者とのネットワークをさらに強化し、恒常的でより親密な研究者交流をめざすため、海外研究交流室が中心となり海外研究交流シンポジウムを実施しています。

平成20年度はロシア国立極東大学付属東洋大学においてシンポジウムを開催しました。平成21年度はアルザス・ヨーロッパ日本学研究所(フランス)・ライデン大学(オランダ)の研究者を招き、日文研で行う予定です。

【国際研究集会】

日本の文化、社会に対する世界各国の関心の高まりにともない、研究者の問題意識、研究方法も著しく多様化してきています。このような状況に対応するため、主として日文研での共同研究をテーマに、昭和63年から国際研究集会を開催し、日本研究発展のための国際的な討論の場を設けています。

また、各研究集会の期間中には、普及活動の一環として公開講演会を実施しています。



国際研究集会

共同利用

【図書館】

中央に東屋風のサービスカウンターを配置した円形図書館は、3層の吹き抜け構造になっており、落ち着いた利用空間を提供しています。ここでは、日本研究に必要な各種資料を幅広く収集し、研究者の利用に供するとともに、さまざまな情報提供に努めています。平成7年に増設した資料館は、固定書架・電動集密書架のほか、貴重図書室、地図資料室、研究用個室、マイクロ資料室等が配置されています。また、自由接架方式を採用していますので、利用者は43万冊の図書を自由に手に取って閲覧することができます。

個々の資料の配架場所・貸出状況は各フロアー配置の検索用端末機で調べることができます。



図書室

【資料の収集】

日文研における資料収集方針は、外国語で書かれた日本研究図書および訳書の網羅的収集、日本研究に必要な基本図書・雑誌の収集、日本研究に関する文献目録等の網羅的収集、としています。その他、幕末明治期のガラス写真・色彩写真、古地図、ビデオ・CDなどの映像音響資料、科学史関連資料、医学史関連資料、日中関係資料

等も積極的に収集しています。

【資料の利用】

教職員・学生等は所蔵する資料を自由に利用することができます。また、外部の方も学術研究・調査を目的に事前申請のうえ閲覧することができます。これらは、インターネット上で検索でき、図書館間相互利用制度により文献複写や現物貸借サービスを申し込みます。

【データベース等の公開】

日文研が収集した日本研究資料、日文研教員の研究成果をはじめ、日文研以外の機関所有の日本研究資料等のデータベース化を推進し、48本のデータベースをWebで公開しています。また、検索エンジンも備えていることから、世界中の幅広い日本研究の推進に役立てられています。

Webでの公開は資料のデータベースばかりでなく、学術講演会等のインターネット放送を整備しており、平成9年度以降の146本分の講演記録をインターネット放送で公開しています。講演会当日はリアルタイムで視聴可能です。



『化物婚礼絵巻』より 婚礼の盃を交わす場面

社会連携

「社会に開かれた研究機関」として、研究活動・研究協力活動により得られた成果を広く社会に還元するため、以下のような普及活動を行っています。

【学術講演会】

年3～4回、日文研講堂において、日文研の教員・外国人研究員による研究成果の発表と日本研究の普及を目的として学術講演会を開催しています。

【東京講演会】

毎年6月に、東京において日本研究の普及を目的に、総合テーマ「日本文化を考える」と題して日文研の教員・外国人研究員による講演会を開催しています。

【公開講演会】

日文研で開催される国際研究集会・国際シンポジウムの期間中に、普及活動・社会貢献の一環として公開講演会を開催しています。

【一般公開】

毎年11月頃に、図書館・セミナー室・教員研究室・共同研究室等を公開して日頃の活動状況を紹介し、また日文研講堂において日文研の教員・外国人研究員による講演会を開催しています。当日は展示コーナーを設けて研究資料データベースの紹介や日文研所蔵の貴重図書・写真、前年度の教員の出版物等を展示しています。

大学院教育

大学共同利用機関を基盤機関とする総合研究大学院大学の文化科学研究科(博士後期課程)の中に本センターを基盤とする「国際日本研究専攻」が設置されています。同専攻には国外からの留学生を含む院生が学んでおり、国際的視野から学際的、総合的な日本研究を推進する教育と研究が行われています(平成21年5月1日現在、在学生15名)。

また、特別共同利用研究員制度により、大学の要請に応じて大学院学生を受け入れ、研究指導に協力しています(平成21年5月1日現在8名)。

各機関の活動



総合地球 環境学研究所

RESEARCH INSTITUTE FOR HUMANITY AND NATURE



総合地球環境学研究所外観

概要

平成13年(2001)に創設された総合地球環境学研究所(地球研)は、「地球環境問題の根源は、人間文化の問題である」という基本認識のもと、「地球環境問題に関する総合的研究」を行うことを目的としています。地球環境問題の解決には、従来の科学技術的方法だけでは限界があります。必要なのは、自然科学系と人文社会科学系の研究者の協働であり、問題を個別ではなく、全体、総体として把握しようという姿勢です。地球研をめざす「総合地球環境学」は、別の言い方をすれば、地球環境問題に関する統合知consilienceを構築し、人間科学humanicsとして人間の生き方そのものを問う、ということになります。

そのために地球研では、環境問題の本質把握に不可欠な「人間と自然との相互作用環」の解明や、問題の克服につながる「未来可能性」を実現する道筋の探究に取り組んでいます。

地球環境学を構築するための研究の枠組みとして、循環、多様性、資源、文明環境史、地球地域学の5つの領域プログラムを設定しており、研究プロジェクトはこの5つの領域プログラムのいずれかに属して、これらの枠組みにおける位置づけを常に明確にしなが、多様な課題に取り組んでいます。

また、平成19年に改組した研究推進戦略センターにおいては、地球研の研究プロジェクトを領域プログラムに収斂させながら、得られた成果の集積・分析・発信を進めるとともに、新たな研究を創出するための戦略を策定する重要な機能を担っています。



統合知の構築(概念図)

研究

地球研における研究は、研究プロジェクト方式と研究者任期制の2つの原則で進められています。研究部のスタッフはいずれかのプロジェクトに属し、一部はプロジェクトリーダーとなって、国内外の研究者と共同研究を進めています。

研究プロジェクト方式は、立ち上げから終了後に至る各段階で、計画の妥当性、実行可能性、成果の意義について評価を受けながら研究を展開することを基本としています。

まず、所内外から公募によって採択されたインキュベーション研究 (IS) を実施し、プロジェクトのシーズが育てられます。半年から1年の後に、研究プロジェクトを企画する段階に至ったと判断されたものは、半年から1年間の予備研究 (FS) を行います。その成果は、所内での討議・審査をふまえて「研究プロジェクト評価委員会 (評価委員会)」で評価され、適切と認められたものは運営会議の承認を経て本研究 (FR) に進むことができます。本研究は、1年間の準備期間のプレリサーチ (PR) を経て、3～5年の研究を実施することになります。

評価委員会は、外国人研究者を含めて研究所外の研究者や有識者から構成されます。各研究プロジェクトは、本研究 (FR) への移行時だけでなく、本研究2年目終了時、全期間の終了1年前および終了時と、評価委員会の厳正な評価を何度も受けることになっています。



現地調査説明会 (ザンビア東部州)

共同利用

【頭脳の共同利用】

地球研では平成20年度までにFR10本が終了し、その成果は様々な形で発信され、活用が検討されています。平成20年度は、14本のFRと2本のPRにおいて、総勢1,200名を超える国内外の研究者が共同研究に参画しました。地球研の研究プロジェクトが、「広い意味での人間文化としての地球環境問題を考える」という基本方針に沿って進められていることから、研究プロジェクトには自然科学系から人文社会科学系までの非常に広い学問分野から研究者が参加しています。また、参加者の所属も、国公立大学や公的機関の研究だけでなく民間研究機関などさまざまです。



研究プロジェクト発表会



プロジェクト研究室

【調査研究フィールドの共同利用】

地球研の研究プロジェクトが調査対象地としている調査研究フィールドは、国内はもとよりアジアを中心に世界各地に展開しています。このほとんどのフィールドにおいて、現地の研究者や実務者と密接に連携して研究プロジェクトの調査研究を進めています。

海外での共同研究は、覚書や研究協力協定を結び、共同研究の推進、研究資料の共有化、人的交流などを進めております。また、外国人研究者を研究プロジェクトの中核的メンバーとして受け入れて共同研究を行っています。さらに、地球研では、こうした共同研究の経験とネットワークを活かし、国内の関連研究機関と連携して、地域・環境に関する情報の共有を組織化することを進めています。

【高精度分析機器の共同利用】

地球環境問題の本質を理解するために有効な最新手法として、安定同位体分析（様々な物質の産地や年代などの同定）、DNA分析（種や品種の詳細な決定など）があります。地球研では高い精度を持つ最新鋭の設備を導入して、これらの分析手法を実際に活用しながら、さらに新たな分析法・活用法を開発し、広く研究者の利用に供して共同利用を促進しています。



安定同位体分析装置

社会連携

【地球研フォーラム】

地球研の理念や研究成果に基づいて、地球環境問題について幅広い問題提起やディスカッションを行うことを目的に、フォーラムを年1回開催しています。平成20年度は「もうひとつの地球環境問題—会うことのない人たちとともに」をテーマに取り上げました。なお、平成21年度は次のとおり開催します。

第8回地球研フォーラム

「よく生きるための環境—エコヘルスをデザインする」

開催日：平成21年7月5日

会場：国立京都国際会館



地球研フォーラム

【地球研市民セミナー】

地球研の研究活動をわかりやすく一般市民に紹介することを目的に、地球研または京都市内の会場において定期的に開催しています。地球研スタッフや所外研究者が講師となり、地球環境問題を具体例にそくして解説し、会場から熱心な質問が毎回寄せられています。平成16年から始まったこのセミナーも平成20年度末までに計31回開催しており、平成21年度はさらに8回程度開催する予定です。

【地球研地域セミナー】

地球研のある京都市から全国各地に出かけ、地元自治体などとの共催で公開講演会を開催しており、地域の有識者や市民の参加のもと、日本の地域ごとの環境と文化に関するさまざまな問題について活発な議論を行っています。平成20年度は大阪府和泉市および沖縄県名護市・国頭村にて開催しました。平成21年度は長野県松本市および石川県金沢市での開催を予定しています。



沖縄県国頭村でのムラ歩き体験

【知恵と文化の京都環境フォーラム】

地球温暖化をはじめとする環境問題が深刻化する中で、暮らしや経済のあり方を見つめ直し、持続可能な社会を形成するため、本フォーラムでは長い歴史と豊かな自然に培われた京都の知恵と文化を生かした新たな生き方や暮らし方を提案します。DO YOU KYOTO?キャンペーンの一環として京都府と共同開催しています。

【出版物】

ニュースレター『地球研ニュース』

(Humanity & Nature Newsletter)

地球研とは何か、どのような活動を行っているのかなどの最新情報を、主に研究者コミュニティ向けに発信するもので、隔月で刊行しています。No.16から内

容体裁をリニューアルし、それに合わせて編集室を充実させました。地球研に関わっている研究者を対象に、コミュニケーションの場の1つとして機能することをめざしています。

地球研叢書

地球研の研究内容や成果の意味を学問的にわかりやすく紹介する出版物で、広く一般書店にて販売されています。平成20年度は、『水と人の未来可能性—しのびよる水危機』（総合地球環境学研究所編、昭和堂、2009年3月）を刊行しました。

大学院教育

地球研の教員は、人間文化研究機構に属する他の4機関と異なり、総合研究大学院大学の教員とはなっていません。しかし、今後の大学院教育展開へ向けて、さらに地球環境学を担う若手研究者を養成する観点から、次の2つの事業を推進しています。

1つ目は、国立大学法人などから大学院学生を特別共同利用研究員として受け入れ、研究指導を行っています。特に、環境関連の分析科学や人類学、植物学、生態学、地理学、農学など、地球環境学に密接に関連する分野での研究をめざす大学院学生を積極的に受け入れています。

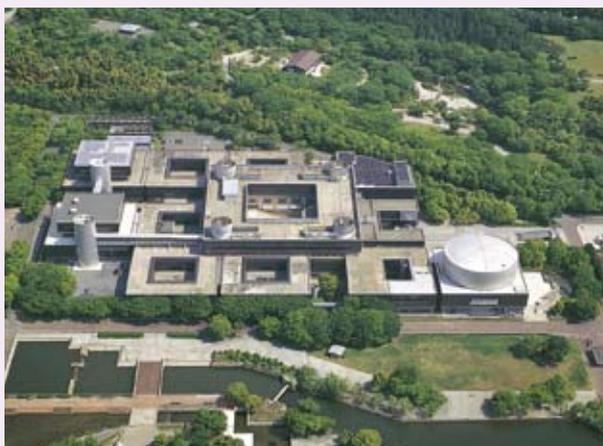
2つ目は、博士課程修了後の若手研究者を研究プロジェクトの研究員として積極的に採用しています。企画・運営や多分野の研究者との交流へも参画させることにより、若手研究者の研究活動の推進と育成を行っています。

各機関の活動



国立民族学博物館

NATIONAL MUSEUM OF ETHNOLOGY



国立民族学博物館全景

概要

国立民族学博物館(民博)は、文化人類学・民族学に関する調査・研究を行い、その成果をとおして、世界の諸民族の社会と文化に関する情報を人びとに提供し、諸民族についての認識と理解を深めることを目的としています。昭和49年(1974)に大学共同利用機関として設置され、昭和52年には博物館を開館しました。

研究

【機関研究】

機関研究は、個人で行うのが難しい規模の大きな課題、学際的な追究を必要とする課題、広く人文社会科学に共通する重要な基礎的課題について、本館の組織をあげて取り組む研究です。文化人類学・民族学の研究センターとしての民博の特性を活かし、学術的、社会的要請に応えるために、分野横断的で先進的な課題を取り上げます。また、研究の過程では研究の国際化および国内外の研究機関との制度的連携を図ることにより、共同研究の高次化を推進します。

これまで、「社会と文化の多元性」「人類学的歴史認識」「文化人類学の社会的活用」「新しい人類科学の創造」の4領域のもとに研究プロジェクトを組織してきましたが、それらは平成21年度中に終了する予定です。そして、21

年度の後半からは新たに法人第二期中期計画に基づく重点型共同研究としての機関研究が「包摂と自律の人間学」「マテリアリティの人間学」の2領域のもとに始動する予定です。これらは、文化人類学・民族学および関係諸分野の発展に寄与し、人文社会科学の再編や新しい分野の創出に貢献することが期待されます。

【共同研究】

共同研究は、文化人類学・民族学および関連分野の特定のテーマについて、館内外の専門家が共同で行う研究です。館内外から研究課題を募り、館外委員を含めた共同利用委員会の審査で決定します。平成21年度は、「文化人類学・民族学および関連諸分野を含む幅広い研究」「本館の所蔵する資料に関する研究」の2つのカテゴリーを設定しています。

平成20年度実施の課題数46件のうち、客員教員・特別客員教員を代表者とするものが8件、公募による館外の研究者を代表者とするものは15件です。共同研究員総数は、本館55名、国立大学196名、公立大学33名、私立大学228名、公的機関42名、民間機関など62名の、計616名です。

【各個研究】

各個研究は、研究者個人が自由な発想に基づいて企画、立案し、実施する研究であり、人文社会科学の研究機関である民博の研究活動の重要な柱です。

【研究組織】

民族社会研究部、民族文化研究部、先端人類科学研究部の3研究部と、2つのセンターがあります。

研究戦略センターは、文化人類学・民族学と周辺諸分野の最新の研究動向をふまえ、民博の研究活動の戦略を策定します。

文化資源研究センターは、文化資源の体系的な管理と情報化、およびその共同利用や社会還元に向けて基礎研究や開発研究を行うとともに、事業推進の企画・調整を目的としています。

【研究成果の公開】

出版活動

民博の専任教員、客員教員・特別客員教員など館内外の研究者が、各個研究、共同研究、国際シンポジウム、科学研究費補助金などによる研究の成果を広く社会に公

開するために、『国立民族学博物館研究報告』『Senri Ethnological Studies (SES)』『Senri Ethnological Reports(SER)』『国立民族学博物館研究年報』を出版しています。館外での商業出版も制度的に奨励しており、平成20年度は5点の刊行物が出版されました。

研究成果公開プログラム

研究成果を効果的に公開し社会還元を図る目的で実施しています。平成20年度は、国際シンポジウム「チベット・ビルマ言語域における言語基層」、一般公開シンポジウム「古代アンデス文明—過去との対話」、研究フォーラム「無国籍者から見た世界—現代社会における国籍の再検討」など、あわせて6件の研究集会を実施しました。



一般公開シンポジウム「古代アンデス文明—過去との対話」

共同利用

文化人類学・民族学を核とする諸分野の資料や情報を集積・整備して国内外研究者の共同利用に資するとともに、展示や各種事業などを通じて研究成果の社会還元を行っています。

民博所蔵の諸資料は、館内外における諸分野の研究や大学教育への活用、および他の博物館への貸し付けなどをおして、共同利用に供しています。

標本資料: 274,494点、映像音響資料: 70,151点、文献図書資料: 図書613,362冊／雑誌16,276種、HRAF (Human Relations Area Files): 地域(民族集団) ファイル385ファイル／原典(テキスト)7,141冊。

平成18年度から「民族学資料共同利用窓口」を設置し、所蔵資料の利用に関する問い合わせに対応しています。

URL <http://www.minpaku.ac.jp/kyodomado.html>

【みんぱく図書室】

文献図書資料等の情報提供だけでなく、情報公開に積極的に取り組んでいます。国立情報学研究所NACSIS-CATへの遡及入力や、みんぱく図書室所蔵貴重図書展示「古地図に見るアフリカの変貌—大航海時代から植民地分割の時代まで」を開催し、通常は来館者の目に触れることのない貴重な研究資料を公開しました。

また、対象に一般利用者を含めた、図書の館外貸出を開始しました。

【データベース】

文化人類学・民族学に関わる膨大な研究資料情報を、インターネットで館内外の研究者に提供しています。民博所蔵の標本資料や映像・音響資料、文献・図書資料などの目録情報をはじめ、「韓国生活財データベース」「中西コレクションデータベース—世界の文字資料」「松尾三憲旧蔵絵葉書コレクション」などがあります。多くは、画像情報を含んでいます。

【展示】

本館展示

本館展示は、世界をオセアニア、アメリカ、ヨーロッパ、アフリカ、それに日本を含むアジア各地域に分けた地域展示と、音楽・言語というジャンル別に世界の民族文化を通覧する通文化展示を常設しています。地球規模の変化の時代に生きる人びとの暮らし、またその姿をいきいきと伝えるため、平成20年度より本館展示場の改修に着手し、平成21年3月26日には、アフリカ展示と西アジア展示を一般公開しました。平成21年度は、音楽展示、言語展示、共同利用展示場などを更新する予定です。



改修され新しくなったアフリカ展示

特別展示

特別展示は、特定のテーマに関する最新の研究成果を総合的・体系的に紹介する大規模な展示で、特別展示館において開催します。

「千家十職×みんぱく：茶の湯のものづくりと世界のわざ」
平成21年3月12日～6月14日

京の千家十職という専門家たちが、民博所蔵の27万点におよぶ標本資料から選出した資料をもとに新たに作品をつくりました。これらの作品と民族資料が融合した展示空間は、今まで民博で開催してきたなかでも斬新な特別展示です。

この特別展示は、十職各家の伝統、当代の技術、時代の感性など、新たな環境でのものづくりの素晴らしさを世界に発信する企画となっています。



特別展示「千家十職×みんぱく：茶の湯のものづくりと世界のわざ」

「自然のこえ 命のかたち—カナダ先住民の生みだす美」
平成21年9月10日～12月8日

カナダ先住民が歴史的につくりだしてきた生活用具や儀礼具を地域ごとに展示することによって、彼らの文化や世界観の多様性と共通性を提示します。さらに、カナダ先住民の中から、北西海岸先住民とイヌイットに関する映像資料、および彼らが制作した版画や彫刻品など現代のアート作品を取り上げ、先住民文化のユニークさとすばらしさを紹介するとともに、人と自然の関係や人と人の関係、人とモノの関係について考えるきっかけを提供します。

企画展示

企画展示は、現代的な問題や最先端の研究課題などを

紹介する展示で、本館展示場において開催します。

平成21年度は、「ナシ族画家が描く生活世界—雲南省西北部ではぐくまれた絵心」展(平成21年3月19日～6月23日)や、チベットの基層文化を紹介する「チベット ポン教の神がみ」展(平成21年4月23日～7月21日)などを予定しています。

その他にも、他の博物館、大学等との協力による共催展示を実施しています。

社会連携

【学術講演会】

文化人類学・民族学をとおした異文化理解と、民博の学術研究機関としての役割を理解してもらうために、先端的な研究活動の成果を社会に積極的に還元しています。

平成20年度は、公開講演会「ブラジルと日本」(平成20年10月東京)、「激動するインド世界」(平成21年3月大阪)を実施しました。

【国際連携】

平成20年度は新たに、中華人民共和国の内蒙古大学と学術、文化交流を目的とする協定を締結しました。また、大韓民国の国立民俗博物館との協定に基づき、新たな事業として蔚山広域市との3者で「蔚山達里100年学術交流」事業協定を締結し、民俗誌作成、ドキュメンタリー映像制作、特別企画展の実施に向けて協力体制を確立しました。さらに、フランスの人間科学研究所(Maison des Sciences de l'Homme)との協定に基づき、20年度に開催されたシンポジウムに研究者を派遣しました。この他、ペルーの国立サン・マルコス大学との協定に基づき、考古学調査と学術交流を推進、順益台湾原住民博物館との協定に基づき、台湾原住民族の現代的動態にかかわる調査と学術交流を推進しました。

国際協力機構(JICA)集団研修「博物館学集中コース」は、世界各地の博物館専門家を対象として、博物館の運営に必要な実践的技術の研修を実施し、各国文化の振興に貢献できる人材を育成しています。毎年、約10名の研修生を受け入れ、滋賀県立琵琶湖博物館と共同で4か

月間の研修を運営しています。

また、財団法人ユネスコ・アジア文化センターからの委託事業として、無形文化遺産保護パートナーシッププログラム「無形文化遺産保護のための集団研修」(第2回)を、10カ国からの外国人研修員22名を受け入れ、20年12月に実施しました。

【広報出版】

『民博通信』『MINPAKU Anthropology Newsletter』『月刊みんぱく』などの定期刊行物、ならびに『国立民族学博物館展示ガイド』、特別展の展示図録や案内リーフレットなどの展示関連刊行物をとおり、研究や博物館活動を広報しています。

【ゼミナール、ウィークエンド・サロン】

研究部の教員等による最新の研究成果に関する「みんぱくゼミナール」を毎月第3土曜日に実施しています。

また、平成19年度からは、研究部の教員と来館者が展示場内で、より身近に語り合いながら、民博の研究を知っていただく「みんぱくウィークエンド・サロン 研究者と話そう」を、ほぼ毎週日曜日に開催しています。

【みんぱく映画会】

文化人類学・民族学に関する貴重な映像資料を、教員の解説を交えて上映しています。

平成20年度は、「あの山、人々、この愛—スクリーンの中の中国少数民族」「新春インド映画特集」など計5回開催しました。

【研究公演】

世界の諸民族の音楽や芸能などを紹介し、文化人類学・民族学への理解を深めてもらうことを目的としています。

平成20年度は、「タイ族のこころの調べ—中国雲南省徳宏州からの民間芸術団公演」「インド大地の響き—ラージャスターンの民俗音楽」など計3回の公演を行いました。

【学習キット「みんぱつく」】

世界諸地域の衣装、楽器、道具、学用品などをスーツケースにパックした学習機材です。平成21年4月より「アイヌ文化にであう」を追加して10種類19パックを用意し、学校機関や各種社会教育施設を対象に貸し出しています。



研究公演「インド大地の響き—ラージャスターンの民俗音楽」

【「みんぱくe-news」】

研究情報や各種事業のお知らせを、月1回程度電子メールで配信しています。

URL <http://www.minpaku.ac.jp/e-news/>

【その他】

「音楽の祭日inみんぱく」を開催し、平成20年度は12のグループや個人によってさまざまな楽器による演奏がありました。また、さまざまな教育プログラムに協力しています。

大学院教育

民博には総合研究大学院大学の文化科学研究科(地域文化学専攻、比較文化学専攻)が設置されています。両専攻(博士課程後期)では、独創的な文化人類学・民族学の研究、長期のフィールドワークで得られた資料に基づく学位論文の作成、および広い視野を持った人間性豊かな研究者の養成をめざしています。学生の受け入れを開始した平成元年に第1期生が入学して以来、課程博士45名、論文博士20名を輩出してきました(平成21年5月1日現在、在学生33名)。

また特別共同利用研究員の制度を設けて、国公立大学の大学院学生を受け入れて指導することで、他大学の大学院教育に協力しています(平成21年5月1日現在、7名)。

資料

委員会一覧

経営協議会

❖金田 章裕	機構長
篠原 徹	理事
中尾 正義	理事
小林 敬治	理事
石上 英一	理事
平川 南	国立歴史民俗博物館長
今西 祐一郎	国文学研究資料館長
猪木 武徳	国際日本文化研究センター所長
立本 成文	総合地球環境学研究所長
須藤 健一	国立民族学博物館長
岩男 壽美子	慶應義塾大学名誉教授
宮崎 恒二	東京外国語大学理事
大原 謙一郎	(財)大原美術館理事長
栄原 永遠男	大阪市立大学大学院文学研究科教授
高村 直助	横浜市歴史博物館館長
永井 多恵子	ジャーナリスト
平田 保雄	日経BP社代表取締役社長
福原 義春	資生堂名誉会長
藤井 宏昭	(独)国際交流基金顧問
古澤 巖	鳥取環境大学長

教育研究評議会

❖金田 章裕	機構長
篠原 徹	理事
中尾 正義	理事
平川 南	国立歴史民俗博物館長
今西 祐一郎	国文学研究資料館長
猪木 武徳	国際日本文化研究センター所長
立本 成文	総合地球環境学研究所長
須藤 健一	国立民族学博物館長
安田 常雄	国立歴史民俗博物館副館長
谷川 恵一	国文学研究資料館複合領域研究系研究主幹
白幡 洋三郎	国際日本文化研究センター研究調整主幹
佐藤 洋一郎	総合地球環境学研究所副所長/プログラム主幹
森 明子	国立民族学博物館研究戦略センター長
青柳 正規	国立西洋美術館長
大塚 柳太郎	(財)自然環境研究センター理事
川北 稔	京都産業大学客員教授
窪田 幸子	広島大学大学院総合科学研究科准教授
佐藤 宗諱	奈良女子大学名誉教授
平野 由紀子	お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科教授
鷺田 清一	大阪大学総長

人間文化研究総合推進検討委員会

❖金田 章裕	機構長
篠原 徹	理事
中尾 正義	理事
小林 敬治	理事
石上 英一	理事
安田 常雄	国立歴史民俗博物館副館長
谷川 恵一	国文学研究資料館複合領域研究系研究主幹
小松 和彦	国際日本文化研究センター教授
渡邊 紹裕	総合地球環境学研究所プログラム主幹
田村 克己	国立民族学博物館副館長
川北 稔	京都産業大学客員教授
曾根原 登	国立情報学研究所情報社会関連研究系教授・主幹
斎藤 修	一橋大学名誉教授
佐倉 統	東京大学大学院情報学環教授
佐野 みどり	学習院大学文学部教授
中島 尚正	海陽学園海陽中等教育学校長
平川 新	東北大学東北アジア研究センター教授
宮崎 恒二	東京外国語大学理事

評価委員会

❖金田 章裕	機構長
篠原 徹	理事
中尾 正義	理事
小林 敬治	理事
大崎 仁	機構長特別顧問
秋道 智彌	総合地球環境学研究所副所長/研究推進戦略センター長
栗城 繁夫	事務局長
常光 徹	国立歴史民俗博物館副館長
寺島 恒世	国文学研究資料館文学資源研究系教授
牛村 圭	国際日本文化研究センター研究部教授
渡邊 紹裕	総合地球環境学研究所プログラム主幹
三尾 稔	国立民族学博物館館長補佐
岩男 壽美子	慶應義塾大学名誉教授
鷺田 清一	大阪大学総長
宮崎 恒二	東京外国語大学理事
川北 稔	京都産業大学客員教授
水田 健輔	(独)国立大学財務・経営センター准教授

機構会議

❖ 金田 章裕	機構長
篠原 徹	理事
中尾 正義	理事
小林 敬治	理事
石上 英一	理事
平川 南	国立歴史民俗博物館長
今西 祐一郎	国文学研究資料館長
猪木 武徳	国際日本文化研究センター所長
立本 成文	総合地球環境学研究所長
須藤 健一	国立民族学博物館長

企画・連携・広報室

❖ 篠原 徹	理事
常光 徹	国立歴史民俗博物館副館長
鈴木 淳	国文学研究資料館副館長
白幡 洋三郎	国際日本文化研究センター研究調整主幹
秋道 智彌	総合地球環境学研究所副所長/研究推進戦略センター長
田村 克己	国立民族学博物館副館長

連携研究委員会

❖ 篠原 徹	理事
田村 克己	国立民族学博物館副館長
井原 今朝男	国立歴史民俗博物館歴史研究系教授
陳 捷	国文学研究資料館アーカイブズ研究系准教授
井上 章一	国際日本文化研究センター研究調整主幹
渡邊 紹裕	総合地球環境学研究所プログラム主幹
岸上 伸啓	国立民族学博物館先端人類科学研究部長
伊藤 亜人	早稲田大学アジア研究機構アジア研究所上級研究員 (研究院教授)
大塚 柳太郎	(財)自然環境研究センター理事
村井 章介	東京大学大学院人文社会系研究科教授
ツバタナ・クリステワ	国際基督教大学教養学部教授

研究資源共有化事業委員会

❖ 石上 英一	理事
常光 徹	国立歴史民俗博物館副館長
安達 文夫	国立歴史民俗博物館広報連携センター長
古瀬 蔵	国文学研究資料館複合領域研究系教授
山田 奨治	国際日本文化研究センター研究部准教授
関野 樹	総合地球環境学研究所研究推進戦略センター准教授
久保 正敏	国立民族学博物館文化資源研究センター教授
山本 泰則	国立民族学博物館文化資源研究センター准教授
安永 尚志	国文学研究資料館名誉教授
柴山 守	京都大学東南アジア研究所地域研究ネットワーク部教授
原 正一郎	京都大学地域研究統合情報センター教授
栗城 繁夫	事務局長

地域研究推進委員会

❖ 金田 章裕	機構長
小野 元之	(独)日本学術振興会理事長
佐藤 慎一	東京大学理事(副学長)
佐藤 次高	早稲田大学イスラーム地域研究機構長
斯波 義信	(財)東洋文庫特別顧問
田中 耕司	京都大学地域研究統合情報センター長
田村 和子	共同通信社客員論説委員
濱下 武志	龍谷大学国際文化学部教授
平野 健一郎	人間文化研究機構地域研究推進センター長 早稲田大学/東京大学名誉教授
山田 辰雄	慶應義塾大学名誉教授
渡邊 幸治	(財)日本国際交流センターシニアフェロー
田辺 明生	京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科教授
長崎 暢子	龍谷大学人間・科学・宗教総合研究センター研究 フェロー 龍谷大学/東京大学名誉教授
飯塚 正人	東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所副所長
中尾 正義	理事
大崎 仁	機構長特別顧問
小林 敬治	理事
立本 成文	総合地球環境学研究所長
須藤 健一	国立民族学博物館長

◆ 職員数

(平成21年5月1日現在)

役員 7	館長・所長 5	研究教育職員 187	地域研究推進センター研究員 13	事務・技術職員 200
------	---------	------------	------------------	-------------

役員および職員(常勤)			外国人研究員	客員教員(国内)
機関名	種別	現員		
機構本部	役員	7		
	研究教育職員	1		
	地域研究推進センター研究員	13		
	事務・技術職員	26		
	小計	47	0	1
国立歴史民俗博物館	館長	1		
	研究教育職員	44		
	事務・技術職員	41		
	小計	86	0	9
国文学研究資料館	館長	1		
	研究教育職員	29		
	事務・技術職員	34		
	小計	64	0	4
国際日本文化研究センター	所長	1		
	研究教育職員	27		
	事務・技術職員	31		
	小計	59	12	16
総合地球環境学研究所	所長	1		
	研究教育職員	28		
	事務・技術職員	24		
	小計	53	5	8
国立民族学博物館	館長	1		
	研究教育職員	58		
	事務・技術職員	44		
	小計	103	7	4
計	役員	7		
	館長・所長	5		
	研究教育職員	187		
	地域研究推進センター研究員	13		
	事務・技術職員	200		
	計	412	24	42

非常勤研究員等

種別	国立歴史民俗博物館	国文学研究資料館	国際日本文化研究センター	総合地球環境学研究所	国立民族学博物館	計
機関研究員	4	6	6	0	5	21
リサーチ・アシスタント	2	10	3	2	14	31
プロジェクト研究員	0	1	1	78	0	80

(単位:人)

◆ 予算・決算

平成21年度予算

収入	13,523
運営費交付金	11,714
施設整備費補助金	1,199
自己収入	610
支出	13,523
教育研究経費	9,899
一般管理費	2,425
施設整備費	1,199

(単位:百万円)

平成20年度予算

収入	14,323
運営費交付金	11,643
施設整備費補助金	2,070
自己収入	610
支出	14,323
教育研究経費	9,808
一般管理費	2,445
施設整備費	2,070

(単位:百万円)

平成20年度決算

収入	14,388
運営費交付金	11,643
施設整備費補助金	2,070
自己収入	675
支出	14,199
教育研究経費	9,533
一般管理費	2,596
施設整備費	2,070

(単位:百万円)

◆ 共同研究の件数および共同研究員数 (平成20年度)

	共同研究 件数	総数	共同研究員の所属機関の内訳						
			国立大学等	公立大学	私立大学	公的機関	民間機関	外国機関	左記以外
国立歴史民俗博物館	42	549	331	6	105	25	5	22	55
国文学研究資料館	17	254	119	13	72	8	7	8	27
国際日本文化研究センター	15	526	256	15	163	25	14	2	51
総合地球環境学研究所	19	1,102	634	37	141	85	39	155	11
国立民族学博物館	46	616	256	33	229	42	30	0	26
計	139	3,047	1,596	104	710	185	95	187	170

(単位:件、人)

◆ 研究者の受け入れ・派遣 (平成20年度)

種別	国立歴史民俗博物館	国文学研究資料館	国際日本文化研究センター	総合地球環境学研究所	国立民族学博物館	計
日本学術振興会特別研究員	1	1	1	1	6	10
日本学術振興会外国人特別研究員	0	0	3	1	2	6
その他外来研究員	6	9	14	5	68	102
外国人研究員招へい	3	1	26	9	11	50

(単位:人)

◆ 外部資金の受け入れ

科学研究費補助金(申請)

機関名	平成21年度	平成20年度	平成19年度
機構本部	1(0)	0(0)	1(1)
国立歴史民俗博物館	31(23)	41(25)	59(38)
国文学研究資料館	45(34)	44(34)	47(29)
国際日本文化研究センター	18(12)	13(6)	16(13)
総合地球環境学研究所	71(53)	59(41)	57(38)
国立民族学博物館	71(39)	51(30)	57(38)
計	237(161)	208(136)	237(157)

(単位:件、カッコ内は新規分で内数)

科学研究費補助金(採択)

機関名	採択件数・金額	平成20年度	平成19年度	平成18年度
国立歴史民俗博物館	件数	24(8)	27(7)	32(14)
	金額	139,525	157,300	187,150
国文学研究資料館	件数	21(11)	26(8)	30(9)
	金額	65,700	74,700	92,100
国際日本文化研究センター	件数	11(1)	9(6)	11(3)
	金額	46,266	43,600	115,200
総合地球環境学研究所	件数	33(15)	30(13)	37(15)
	金額	64,140	77,114	121,410
国立民族学博物館	件数	38(14)	38(16)	25(10)
	金額	118,240	134,000	102,200
計	件数	127(49)	130(50)	135(51)
	金額	433,871	486,714	618,060

(単位:件、カッコ内は新規分で内数)

受託研究

機関名	受け入れ	平成20年度	平成19年度	平成18年度
国立歴史民俗博物館	件数	0	1	1
	金額	0	1,272	1,455
国文学研究資料館	件数	0	1	0
	金額	0	910	0
国際日本文化研究センター	件数	1	2	5
	金額	4,100	6,854	35,183
総合地球環境学研究所	件数	8	8	9
	金額	58,725	55,004	84,682
国立民族学博物館	件数	3	3	3
	金額	6,510	16,300	16,400
計	件数	12	15	18
	金額	69,335	80,340	137,720

(単位:件、千円)

寄附金

機関名	受け入れ	平成20年度	平成19年度	平成18年度
国立歴史民俗博物館	件数	2	1	2
	金額	3,000	1,000	1,850
国文学研究資料館	件数	30	99	3
	金額	1,439	8,114	47,650
国際日本文化研究センター	件数	7	10	5
	金額	9,663	15,447	6,400
総合地球環境学研究所	件数	6	3	6
	金額	7,520	2,500	33,200
国立民族学博物館	件数	9	19	6
	金額	5,128	19,649	11,780
計	件数	54	132	22
	金額	26,750	46,710	100,880

(単位:件、千円)

その他の外部資金

機関名	受け入れ	平成20年度	平成19年度	平成18年度
国立歴史民俗博物館	件数	0	0	1
	金額	0	0	2,501
国文学研究資料館	件数	0	0	1
	金額	0	0	960
国際日本文化研究センター	件数	0	0	0
	金額	0	0	0
総合地球環境学研究所	件数	0	0	0
	金額	0	0	0
国立民族学博物館	件数	1	1	1
	金額	1,200	8,000	8,000
計	件数	1	1	3
	金額	1,200	8,000	11,461

(単位:件、千円)

❖ データベース一覧 (平成20年度作成分)

国立歴史民俗博物館

分類	名称
データベースれきはく	館蔵高松宮家伝来禁裏本

国文学研究資料館

分類	名称
書誌・目録データベース	伝記解題データベース
	日本文学国際共同研究データベース

国際日本文化研究センター

分類	名称
日文研所蔵 稀本・資料データベース	WebGIS 日本全図
研究支援データベース	日本語語彙研究文献データベース
	連歌連想語彙データベース
	古事類苑全文データベース
	古事類苑ページ検索システム

国立民族学博物館

分類	名称
所蔵資料画像データベース	日本昔話資料データベース (稲田浩二コレクション)
民族学情報データベース	Talking Dictionary of Khinina-ang Bontok (ボントック語音声画像辞書)
	近代日本の身装電子年表

❖ 大学院教育 総合研究大学院大学

学位授与状況

(平成21年4月1日現在)

文化科学研究科	文学	8
	学術	5

(単位:人)

在学生数

(平成21年5月1日現在)

	研究科	専攻	入学定員	3年次(1年次)		4年次(2年次)			5年次(3年次)			計			
				女子	留学生	女子	留学生	女子	留学生	女子	留学生	女子	留学生		
後期3年博士課程	文化科学	地域文化学	3	2	2	0	2	2	1	11	6	1	15	10	2
		比較文化学	3	2	1	0	2	0	1	14	13	2	18	14	3
		国際日本研究	3	2	0	1	4	4	1	9	4	3	15	8	5
		日本歴史研究	3	1	0	0	6	2	2	24	8	0	31	10	2
		日本文学研究	3	3	3	0	1	0	1	8	2	2	12	5	3
		計	15	10	6	1	15	8	6	66	33	8	91	47	15

(女子・留学生は内数)(単位:人)

❖ 特別共同利用研究員

(平成21年5月1日現在)

国立歴史民俗博物館	国文学研究資料館	国際日本文化研究センター	総合地球環境学研究所	国立民族学博物館	計
3	4	8	0	7	22

(単位:人)

国立歴史民俗博物館

〒285-8502

千葉県佐倉市城内町117

TEL:043-486-0123(代表)

<http://www.rekihaku.ac.jp/>

【最寄り駅】

京成成田線京成佐倉駅(徒歩約15分)、JR佐倉駅→ちばグリーンバス15分(「国立歴史民俗博物館」下車)



国文学研究資料館

〒190-0014

東京都立川市緑町10-3

TEL:050-5533-2900(代表)

<http://www.nijl.ac.jp/>

【最寄り駅】

多摩都市モノレール高松駅(徒歩約7分)

JR立川駅(徒歩約25分)



国際日本文化研究センター

〒610-1192

京都府京都市西京区御陵大枝山町3-2

TEL:075-335-2222(代表)

<http://www.nichibun.ac.jp/>

【最寄り駅】

阪急京都線阪急桂駅→京都市バス30分(「桂坂小学校前」下車)
JR山陰本線桂川駅→ヤサカバス25分(「花の舞公園前」下車)



総合地球環境学研究所

〒603-8047

京都府京都市北区上賀茂本山457-4

TEL:075-707-2100(代表)

<http://www.chikyu.ac.jp/>

【最寄り駅】

地下鉄烏丸線国際会館駅→京都市バス6分(「地球研前」下車)
叡山電鉄鞍馬線二軒茶屋駅(徒歩約10分)



国立民族学博物館

〒565-8511

大阪府吹田市千里万博公園10-1

TEL:06-6876-2151(代表)

<http://www.minpaku.ac.jp/>

【最寄り駅】

大阪モノレール万博記念公園駅(徒歩約15分)



大学共同利用機関法人

人間文化研究機構

〒105-0001

東京都港区虎ノ門4-3-13

神谷町セントラルプレイス2階

TEL:03-6402-9200(代表)

<http://www.nihu.jp/>

【最寄り駅】

地下鉄日比谷線神谷町駅(出口4b徒歩約2分)

地下鉄三田線御成門駅(出口A5徒歩約10分)



2009年7月発行